

# 外国人教師のみた名古屋大学

加藤 詔士

一 国際交流を拓いた外国人教師

(一) 戦前日本の外国人教師

(二) 名古屋大学の外国人教師(戦前)

二 外国人教師の日本研究・日本体験記

(一) 予期せぬ雇用効果

(二) G・C・アレンの日本経済研究

(三) L・H・ハミツチュの日本文化研究

(四) G・C・アレン 『一英国人教師のみた日本、回顧六十年』(一九八三)

### 三 外国人教師のみた名古屋大学

(一) 名古屋大学回想記

(二) A・フォン・ローレツ 「公立医学所の報告」(二八七七)

(三) F・C・A・ハーン 「愛知医学専門学校の思い出」(一九三〇)

(四) G・C・アレン 「名古屋高等商業学校の学生と教師」(一九八三)

### 四 まとめ

## 一 国際交流を拓いた外国人教師

### (一) 戦前日本の外国人教師

国際交流の盛んな昨今である。留学生の海外派遣とともに、外国人教師が積極的に招かれている。

一九八二(昭和五七)年からは、日本人でなくても(日本の国籍を有しない者でも)、国公立の教員に就任できるようになった。この年九月一日付けで、国公立大学外国人教員任用特別措置法<sup>①</sup>が施行されたことで、外国人教師の任用が一段と促進された。日本の国籍を有しない外国人を教授・助教授・講師に任用することで、「教育及び研究の進展を図るとともに、学術の国際交流の推進に資する」ことが目ざされたのである。

外国人教師は、戦前にも盛んに招聘された。第一は明治前半期であって、西洋文化を導入するために、先進諸国

から進んだ技術や学問を體現した人材が積極的に招聘された。政府だけでなく、地方の官庁も民間も政府に呼応して多数の外国人を招き入れた。お雇い外国人、ないしお雇い教師といわれた人たちである。ユネスコ東アジア文化研究センターによる総合的な調査研究によれば、一八六八（明治元）年から一八八九（明治二二）年までに活躍した、史実の確かな官・公・私のお雇い外国人は二二九九名を数える<sup>(2)</sup>。

第二に、旧制の高等学校ならびに専門学校にも、外国人教師が盛んに招かれた。外国語を教える教師が多かったが、専門科目、さらには西欧の音楽やスポーツなども伝えたことで注目される。

旧制の高等学校ならびに専門学校に招かれたから外国人教師は、明治期のお雇い教師に比べると知られるところは少ないように思われる。それでも、旧制高等学校記念館の調査によると、一九九六（平成八）年八月現在、「旧制高校だけでも六百人以上」を数える<sup>(3)</sup>。

### (二) 名古屋大学の外国人教師（戦前）

#### (1)

名古屋大学にも、戦前から、数おおくの外国人教師が招聘されている。

名古屋大学は、官制上、一九三九（昭和一四）年四月一日に創設された名古屋帝国大学に端を発しているが、数々の前史をもつ。前身校だけでなく包括学校もある。

前身校である医学講習場・公立医学講習場・公立医学所・公立医学校には、お雇い医学教師が招かれている。一八七三（明治六）年五月にドイツ系アメリカ人のT・H・ヨングハンス（T. H. Yunghaus）が、つづいて一八七六（明治九）年五月になるとオーストリア人のA・フォン・ローレッツ（Albrecht von Roretz, 一八四六—一八八四）

がやって来て、一八八一（明治一四）年四月まで西洋医学を伝播している<sup>(4)</sup>。本学の起源は一八七一（明治四）年八月に開設された名古屋県仮医学学校および仮病院にまでさかのぼるから、本校は開校まもなく外国人教師が招かれたことになる。

(2)

一方、包括学校である名古屋高等商業学校ならびに第八高等学校にも、多数の外国人教師が招かれた。

まず、名古屋高等商業学校は、開校二年目の一九二一（大正一〇）年に、早くも五名の外国人教師が赴任している<sup>(6)</sup>。英語担当のA・E・ニコルズ（英国）とA・P・マッケンジー（英国）、フランス語のA・ブーツ（フランス）、ドイツ語・商業地理のA・ヨーン（ドイツ）、商業学・英語のG・C・アレン（英国）の諸氏である。以来、一九四九（昭和二四）年五月に新制の名古屋大学に包摂されるまでに、外国人教師は総勢一七名（雇教師および嘱託を含む）を数える。その内訳は別表1<sup>(7)</sup>のとおりである。英語（五名）、ドイツ語（五名）、フランス語（二名）、支那語（四名）という外国語の教師だけでなく、商業地理（二名）、商業学（二名）、商業史（三名）といった専門科目、さらには体操（一名）担当の教師もいた。出身国についてみると、英国五名、ドイツ五名、フランス一名、アメリカ一名、中華民国三名、満州国一名、ロシア一名という内訳である<sup>(8)</sup>。語学教師については、その教育内容上、外国人教師への依存は大きく、しかも長く継続したが、専門科目担当の外国人教師も少なからず招かれていたことは、注目値する。

第八高等学校の場合も、一九〇八（明治四一）年の創立から一九四九（昭和二四）年に名古屋大学へ包摂されるまで、語学教師を中心に、のべ一五名の外国人教師（雇教師および嘱託を含む）が招かれている<sup>(9)</sup>。別表2にまとめたように、英語教師が九名、ドイツ語教師五名、ラテン語教師一名、体操教師一名という内訳である。国籍別では、

表1 名古屋高等商業学校の外国人教師一覧

担当	氏名	出身国	在職期間	備考
独語	フリドリヒ・カール・ アルノルド・ハーン	独	大10.9.20～大11.3.31	
仏語	オーギュスト・ブーツ	仏	大10.12.28～大11.10.21	
仏語	ルイズ・アリス・スーポチナ	露	大12.5.9～大13.3.31	
独語 商業地理	アルフレッド・ヨーン	独	大11.4.1～大14.3.31	自13→至14は 「独語」のみ
商業学 英語 商業史	ヂー・シー・アレン	英	大11.9.21～大14.3.31	マスター・オブ・コマース (バーミンガム大学) 自13→至14は「商業史」
支那語	李野山	中華民国	大12.4.10～大14.3.31	
体操	ウイリアム・アール・バークヒル	米	大12.8.8～大14.8.8	
独語	ベルンハルト・ウイルメス	独	大14.4.10～大15.3.31	
英語	エー・ビー・マッケンジー	英	大11.4.11～昭2.4.30 昭4.4.10～昭8.3.31	マスター・オブ・アーツ (トロント大学)
独語	アルフレト・メッケ	独	大15.4.8～昭4.7.31	
英語 商業学 商業史	アーネスト・エフ・ベンローズ	英	大14.12.26～昭5.3.31	
支那語	佟光亨	中華民国	大14.4.10～昭5.8.31	
支那語	程 涛	中華民国	昭6.9.11～昭9.6.30	
英語 商業史 商業地理	アンギザンダー・アツシュト	英	昭5.6.1～昭15.3.31	
英語	エー・イー・ニコルス	英	大10.10.15～昭15.10.31	大14→大15は「英語・タイプ ライティング・商業英語」
独語	リハルト・クンツエ	独	昭4～	
支那語	韓 文育	満州国	昭10～	

表2 第八高等学校の外国人教師一覧

担当	氏名	出身国	在職期間	備考
英語	ピー・ゼー・ウィルデンハート	英	明42～大3.4	マスター・オブ・アーツ
独 羅 匈 語	アルノルド・ハーン	独	明42～大9.3	ドクトル・フィロソフィエ・エト・アル チウム・リベラリウム・マギステル 羅匈語は明43～44, 大5～7
独 語	エルンスト・ヘルマン・ ヘルフリッチュ	独	明43～大2 大3～大13	
英 語	グラハム・デー・ジー・ マーター	英	大3～大3.12	
英 語	ハーベイ・デー・リーランド	米	大4～大5.7	
英 語	エルドン・グリッフィン	英	大5～大8.9	バチェラー・オブ・アーツ
英 語	ヘンリー・コウルター	英	大8～大9.12	
英 語	カスパート・クーバー・ ロビンソン	英	大10～大15.3 昭2～昭5 昭6～昭10	
体 操	ウィリアム・アール・ パークヒル	米	大12.8～大14.8	バチェラー・オブ・フィジカルエ デュケーション
英 語	ヴィクター・チャールス・ スペンサ	英	大15～昭2.5	
独 語	ラインホルト・ ホルスト・ハミツチュ	独	昭9～昭16	ドクトル・デル・フィロソフィ
英 語	レギノルド・スタット・ フィールド・ミルワード	英	昭11～昭16	バチェラー・オブ・アーツ
英 語	ジョン・オウエン・ガントレット	英	昭16～昭17	
独 語	マックス・フリードリヒ・ グラインドル	独	昭17～昭18	
独 語	シェブラー	独	～大14.9	

英国が八名、ドイツ五名、アメリカ二名となる。

## 二 外国人教師の日本研究・日本体験記

### (一) 予期せぬ雇用効果

外国人教師は、戦前の場合、その多くが西洋の進んだ学問や技術を日本人に教授するために招かれた。教育の実践が主務であったのだが、かれらのなかには、学校の経営、学事にかかわる献策という職務を遂行したものもいた。かれら外国人教師の雇用は、教育実践、学校経営、学事にかかわる献策という期待された任務の遂行に加えて、さらに予期せぬ効果が派生したという点でも注目される。

その一は、教育実践という主務を効果的に進めるために、その基礎となる研究をなしたこと、それを西洋に紹介したことである。その二は、日本の観察記ないし体験記を残したこと、学校教師の場合は勤務校についての回想記を残したことである。<sup>⑩</sup>

予期せぬ雇用効果の第一として、数々の研究成果があらわれたことが注目される。教育と研究を一体に進め、教育実践を効果的に進めるために、その基礎となる研究を精力的におこなった教師は少なくない。しかも、自分の専門領域にかかわる学術研究だけでなく、本務の余暇を利用した日本研究をすすめる、顕著な成果を残した場合もある。異文化への憧憬から研究意欲を駆りたてられ、その文化を生みだした歴史や日本人思想などの研究にまでおよんだ。日本の伝統芸術のほかに、日本の風土や歴史、さらには日本人の性格や習慣など、幅広い主題がとりあげられている。それらの日本研究の成果は、世界への日本紹介に寄与したという点で重要性を一段と増す。<sup>⑪</sup>

その代表例をあげると、お雇い教師としては、福井藩の藩校明新館ならびに大学南校の理化学教師W・E・グリフィス (William Elliot Griffis, 一八四三—一九二八) や、工部大学校都検H・ダイアー (Henry Dyer, 一八四八—一九一八) の日本研究が有名である。<sup>(12)</sup> 旧制高等学校教師としては、第四高等学校ならびに第七高等学校の英語教師J・マードック (James Murdoch, 一八五六—一九二二) の日本文化 (日本史) 研究が知られている。<sup>(13)</sup> 小樽高等商業学校の英語教師R・ストーリー (Richard Story, 一九一三—?) の場合は、『日本現代史』という研究書がある。<sup>(14)</sup> 外国人教師の雇用による予期せぬ第二の効果として、かれらが日本観察記ないし日本体験記を残したことが注目される。異国での生活と活動であっただけに、見るもの聞くものを好奇の目でもって書き留めている。しかも、日本人には抜け落ちていた観点からきびしい批判がむけられるから、示唆するところが多い。単なる日本観察記ないし体験記にとどまらず、学校教師の場合は、勤務校についての回想記が含まれている点で重要である。その記録は古い時代であるほど、類似の史料が少ないだけに貴重であるし、公刊された学校史には含まれにくい裏面史的な話もあるから、興味深いものがある。

明治期のお雇い教師による日本体験記としては、東京医学校、東京大学医学部、帝国大学医科大学の医学教師として活躍したE・ベルツ (Erwin von Baelz, 一八四九—一九二二) の『ベルツの日記』、静岡学問所および開成学校の教師E・W・クラーク (Edward Warren Clark, 一八四九—一九〇七) の『日本滞在記』などが知られている。<sup>(15)</sup> 旧制の高等学校ならびに専門学校の外国人教師としては、神戸高等商業学校の商業学教師R・スミス (Roy Smith, 一八七八—一九六九) の『日本滞在記』、第五高等学校の英語教師R・クラウダー (Robert Crowder) による近著『わが失われし日本、五高最後の米国人教師』などがある。<sup>(16)</sup>



## (II) G・C・アレンの日本経済研究

### (1)

名古屋大学の外国人教師のなかにも、日本研究において顕著な実績を残したものがいる。とりわけ、名古屋高等商業学校の英国人教師G・C・アレン (George Cyril Allen, 一九〇九—一九八二)、および第八高等学校のドイツ人教師L・H・ハミツチュ (L. Horst Hammitzsch, 一九〇九—一九九一)の研究が注目される。商業学教師およびドイツ語教師としてそれぞれ招聘されたのだが、両者とも若いころの日本体験が日本研究という終生の主題につながった。アレンは、とくに日本の経済発展に造詣が深く、英国における日本研究を経済史の面でリードした。ライプチヒ大学東洋学科出身であったハミツチュは、来日中から松尾芭蕉の研究をはじめており、日本文化のなかでもとくに俳文学の研究と普及に貢献し、ドイツにおける日本学の進展に先導的役割をはたした。二人とも、文字どおり国際交流の推進者として、本学の歴史上記憶されるべき人物であるので、以下にもう少し詳しく紹介する。

### (2)

G・C・アレンは、大正時代に名古屋高等商業学校にやってきた。一九二二(大正一一)年九月二一日から一九二五(大正一四)年三月三一日までの二年半在任し、英語および商業学を担当した。一九二四(大正一三)年から一九二五年までは商業史も担当している。<sup>17)</sup>

出身はバーミンガム大学であり、同大学の商学部および大学院をへて赴任してきた。バーミンガム大学といえは市民大学(赤レンガ大学)の一つであり、一九〇〇(明治三三)年に設立勅許状を獲得して大学に昇格している。<sup>18)</sup>

この大学創立時に開設された商学部は英国本土では最初の商学部であり、あたらしい教育課程を誇っていた。すなわち、同学部は「優れたビジネスマンの養成を目指し、理論と応用を合体させたマーシャル型経済学と、功利主義

的研究に適用された人本主義精神とを根底にして、原理と実地からくる知識の両面を取り入れて入念に組まれた教育課程を成していた<sup>(20)</sup>。その商学部<sup>(21)</sup>の初代教授であったW・J・アシュリー (William James Ashley, 一八六〇—九二七) は「それまで観念的な経済モデルにとらわれた経済学者の目を、現実の工業や商業の実態の研究に向けさせた」人物であり、「商学学位の創設を支援した」<sup>(22)</sup>。

日本では、一九〇〇年代以降、近代化を遂行する機構のひとつとして、実践的な実学人材を養成する多数の高等商業学校が創置され、そこに外国人教師が迎え入れられたが、そのさい、アシュリー教授は英国人教師の人選を依頼された。一九二二(大正一一)年の春、バーミンガム大学商学部長であったかれは、「名古屋に新設されたばかりの高等商業学校に、二年契約で、有能な英国人講師を推薦するよう依頼をうけた時、……ためらうことなくジョージ・アレンの名をあげた」<sup>(23)</sup>。

バーミンガム大学商学部は、名古屋高等商業学校と関係があるだけではない。「原理と実地からくる知識の両面を取り入れ」という、特色ある教育課程を用意しただけに、三井高精(一八八一—一九六八)をはじめ何人かの日本人留学生を受けいれている<sup>(24)</sup>。アレンの在学中、外国人留学生のなかでは日本人学生が一番多かった<sup>(25)</sup>という。しかも、そのような縁から三井家は基金を贈り、それをもとに、一九二二(大正一一)年度には同学部にミツイ財政学講座が創設された。日本とのこのような関係は同大学史上の重要事項として、『バーミンガム大学百年史』などに明記されている<sup>(26)</sup>。

(3)

アレンは、名古屋高等商業学校から戻ると、まず母校のバーミンガム大学の教壇に立った。ついでハル大学、リヴァプール大学へと移り、戦後の一九四七(昭和二二)年から一九六七(昭和四二)年まではロンドン大学ユニヴァ

シテイ・カレッジの政治経済学科教授として活動した。専売および企業間競争制限協定委員会その他の委員なども委嘱され、数々の実務面に参画しつづけた。<sup>(27)</sup>

この間、アレンの主たる研究関心は二つあった。第一は「英国産業の歴史と組織」であり、第二が「日本の経済」であった。このうち、日本経済への関心は「青年のころ日本の名古屋で教師をしながら三年間<sup>PA</sup>すごしたことに由来した」とされている。英国外務省に勤務し、「連合軍占領下にあった日本の経済再建について助言した」という経歴も、特筆される。<sup>(28)</sup>

アレンの自著は一七冊（共著二点を含む）を数え、<sup>(29)</sup>書名に日本を含む著書は十一点にのぼる。そのうち、左記の日本経済研究書がとくに注目される。

- ① *Modern Japan and Its Problems*. Allen & Unwin, London, 1928; 2nd edn., 1990.
  - ② *Japan: The Hungry Guest*. Allen & Unwin, London, 1938.
  - ③ *Japanese Industry: Its Recent Development and Present Condition*. Institute of Pacific Relations, N. Y., 1940.
  - ④ *A Short Economic History of Modern Japan*. Allen & Unwin, London, 1946; 3rd edn., 1972.
- ①は日本研究の第一著であり、日本の経済構造を、「日本文明の底流にある原理に従って解釈しよう」とじっくり練った斬新な試みが綴られた本<sup>(30)</sup>であり、「日本人の国民性や社会のしくみと、日本の政治、教育、財政、産業などの仕組みの分析とを関連付けて考える」ことに着手した<sup>(30)</sup>著作として知られる。同書は、後継者のR・P・ドーア(Ronald Philip Dore, 一九二五—)の序文を添えた再版本が一九九〇(平成二)年に出ている。<sup>(30)</sup>
- ②③では日本の工業部門の発展を分析し、「日本の経済構造における中小企業の重要性を強調」した。④では、ア

レン特有の比較論的方法で、「近代化と西洋化の黎明期から一九三七年の中国との戦争勃発までの日本経済の発展の歴史を解説した」。後半部分には、敗戦で壊滅した日本にとり「賢明な経済政策をいかに決定していくかについての参考意見」が示されている。<sup>(31)</sup>

また、日本語になった著書が三点あり、そのなかには、『貿易戦略における日本の地位』(一九六九)および『日本経済を考える、イギリス経済との比較から』(一九七六)という日本研究が含まれる。<sup>(32)</sup>

これらの著作を含め、アレンの日本研究にはいくつかの特色がみられる。第一は、日本の社会経済や産業上の諸問題に対しては、「西洋的な方法による解決は難し」く、「建設的な批評や忠告をしようと思えば、日本の制度の特殊性を少しでもよく理解するしかない」という確信から、対応策を提案したことである。第二に、統計的な根拠や現場からえた情報ないし実態調査を豊富に盛りこんで記述するという、「経験的研究姿勢」がみられる。実際、来日したとき、かれは工場や製作所、工房などを精力的に訪問し、「自分で歩いて行う調査」を実践してみせた。第三に、「日英の経済組織を共通の基準に基づいて比較し、そこから有益な問題点を導き出す」という比較論的方法が、随所にみられる。<sup>(33)</sup>

しかしながら、戦後になると、「アレンはアメリカの学界で養成された次の世代の日本研究者に先を越されてしまった」。かれらは、アレンが先鞭をつけた経済・社会・政治をも取りこんだ総合的・全体論的な研究方法に加えて、分析的・統計的方法をも導入したし、日本の一次・二次史料を大量に幅広く駆使することができたからである。戦前に訓練をうけたアレンにはそうした研究基盤に欠けていたし、しかも「日本語の語学力不足」が「大きな障害」となっていたといわれる。したがって、「かつて初期の著作の優れた特徴であった歴史的視野に立つ彼の解釈が、ともしれば時代遅れになりがち」であったのである。<sup>(34)</sup>

アレンの日本研究にみられる右のような特色については、セイラ・メッツガー<sup>(35)</sup>コートの論稿に詳しい。『英国と日本、架橋の人びと』という訳書に収録されているように、同論稿でアレンは日英間の交流と友好に貢献した一人として位置づけられている。

なお、アレンの右のような日本研究、ならびに日英の文化交流・相互理解の進展に貢献した功勞に対して、一九六一（昭和三六）年には勲三等旭日中綬章が、一九八〇（昭和五五）年には国際交流基金賞が贈られている。<sup>(36)</sup>

### (三) L・H・ハミツチュの日本文化研究

#### (1)

ハミツチュはドイツ語教師として来日し、第八高等学校の教壇に立った。在任は一九三四（昭和九）年から一九四一（昭和一六）年までだから、戦時色が濃くなりつつあったころである。

ハミツチュを雇傭する手続きは、<sup>(37)</sup>一九三三（昭和八）年八月にはじまった。同月二四日、文部省は、栗屋謙文部次官名で重光葵外務次官あてに、第八高等学校がドイツ語教師としてハミツチュを「着任ノ日ヨリ三年間傭聘」したいので、仮契約の締結方をドイツ駐在大使館に依頼してほしい、と依頼した。そのさい、「来ル十月十一日第二学期ヨリ授業ヲ擔任セシメ度儀ニ付至急可然御配慮」をと、付言している。

外務省は、翌々日の二六日、日本大使館に「ホルシュト・ハミツチュ傭聘仮契約締結」を指令すると、翌九月の二二日になって、第八高等学校長（小松原隆二）代理である在ドイツ日本大使館杉下裕次郎一等書記官とハミツチュとのあいだで、契約が結ばれた。その報は、同日、永井松三ドイツ大使から広田弘毅外務大臣あての電報で、まず伝えられた。ベルリンから発せられたその電信文によると、ハミツチュはロンドン発の筥崎丸で来日すること、妻

を帯同すること、邦貨の低落がはなはだしいなかでの招聘であつたこと、などがわかる。

「二十一日 Hamitsch 卜仮契約締結済同氏ハ妻同伴十月六日倫敦発管崎丸ニテ赴任スルコトトナリタルニ付旅費至急電送方御取計相成度シ尚同氏ヨリ二人分倫敦ヨリノ船賃ノミニテ百九十磅余ヲ要スルニ付邦貨低落甚シキ此ノ際妻ノ旅費ハ契約所定ノ最高額ヲ得度キ旨申出アリタルニ付右併セテ御伝達アリタシ」

文部省は外務省に傭僱仮契約締結を依頼したが、そのさい第八高等学校校長小松原隆一とハミツチュとが取り結ぶ、契約書の案文が残っている。十二条からなっていて、要述するとつぎのとおりである。

①「ハミツチュ氏ヲ第八高等学校独逸語教師トシテ傭入レ」、その期間は着任の日より起算して三ヶ年とする。②日本への来航旅費は一九三〇円、ただし妻同伴の場合はさらに千円以内を増額支給する。③月俸は三八〇円、これを毎月下旬に渡すが、日数が一ヶ月未満のときは「日割ヲ以テ計算ス」る。④契約期間中、住宅が提供される。

⑤授業担当は一週二四時間を越えない。授業の時間帯を定める権限は第八高等学校長にある。ただし、ハミツチュは「本文約定ノ時間以外ニ於テ成績調査作文添削其ノ他当然授業ニ附帯スル職務ニ服ス」すること。⑥校長の指示を受け、その職務を尽して同校の諸規則を遵守すること。⑦担当教科について遠慮なく学校長まで意見を述べていいが、「其ノ決定ノ権ハ常ニ同校長ニ存ス」る。

⑧疾病ほか「自己ノ力ノ及バザル事件」によつて任務を果せなくなり、これが四〇日を過ぎたら期間中の給料は半減する。三ヶ月すぎても復帰できなかつたら、契約は解除となる。⑨契約期間中でも一方の都合で解約することができるが、少くとも六ヶ月前に先方に申しでること。⑩ハミツチュが第八高等学校の諸規則の遵奉を拒んだら、ただちに契約は解除となる。⑪契約満期のときと、ハミツチュの「失行又ハ職務懈怠以外ノ理由ニヨリ第八高等学校長ノ申出ニ由リ此ノ契約ヲ廢シ又ハ解約シ直ニ其ノ本国ニ帰国スル」場合についてのみ、帰国旅費一九三〇円を

支給する。妻同伴のときは、さらに千円以内を増額支給する。⑫契約期限内、ハミツチュは第八高等学校長の承諾なしに、ほかの職務に従事してはならない。

契約は職務・雇用期間・俸給・旅費・住宅・雇傭中の心得などの、諸事項にわたり取りかわされている。明治はじめのお雇い教師の場合は、契約期限内は宗教や商売の筋にかかわっていけないなど、私的生活の規制にまでおおよんでいたが、それに比べると、雇用条件はそれほどきびしいとは思われない。

契約のさい、文部省がドイツの日本大使館へ送付した履歴書<sup>38</sup>によると、ハミツチュは一九〇九（明治四二）年一月三日、ドレスデン市の生まれである。父ラインホルト・ハミツチュは建築技師・工匠であった。ドレスデン市第三一市立小学校、三王学校（実科高等学校）をへて、ライプチヒ大学に進んだ。同大学では、一九二九（昭和四）年夏学期から一九三三（昭和八）年冬学期まで、「独逸文学、哲学、普通宗教学ヲ専攻旁ラ日本語、満州語、蒙古語、支那語ヲ兼修」している。一九三三（昭和八）年六月には、同大学において「ドクトル試験ヲ皆済セリ」とある。

『第八高等学校一覽』の職員名簿<sup>39</sup>には、ライプチヒ大学「ドクトル・デル・フィロソフイ」と付記されている。

(2)

ハミツチュはドイツ語教師として赴任したが、ライプチヒ大学東洋学科の出身であつて、すでに日本文化に強い関心をもっていた。「彼の研究テーマは日本の特に徳川時代の思想史<sup>40</sup>だった」。当時から水戸学について研究を進めており、授業中に水戸斉昭や藤田東湖などについて話題にしたことが伝えられている。<sup>41</sup>ドイツ語の時間、学生が難解なテキストに飽きてくると、「テキストを景気よくとじて、音楽の時間にくりかえた」。気分転換というわけである。のどに自身があるとみえて、「自慢のテナーで『ローレライ』をうたいはじめ<sup>42</sup>」ることもあった。

ハミツチュは、ドイツ語を教えていただけでなく、その教授法について深く考えをめぐらしたことが特筆される。

その成果は、「日本高等学校に於けるドイツ語教授に就て」と題する論文にまとめ、『文部時報』の一九三七（昭和一二）年九月一日号に掲載されたことで、広く知られるに至った。日本人が外国語を学習する一般的意義の説明にはじまり、外国人教師と日本人教師の任務分担と協力による望ましい指導体制、ならびに「実際の語学教育と共にドイツの文化的真価」の紹介という、「二つの主眼点」にたった外国人教師に望まれる基本方針の提言、さらには、三年間という短期間におけるドイツ語学習の、学年ごとの目的と望ましい内容・方法、ならびに教材とその活用法、などについての所見を述べている。

日本における語学教授はどうあるべきなのか、日々の教育体験をもとにして思索を重ねた外国人教師は少なくない<sup>(43)</sup>が、ハミツチュこそそうした一人であった。かれの右の論文は、ドイツ語教授についての「代表的な一例」として選定され、のちに『旧制高等学校全集』（一九八五）に再録されていることが注目される。<sup>(44)</sup>

(3)

ハミツチュは第二次世界大戦がいよいよ拡大の様相を呈するなか、日本を離れた。一九四一（昭和一六）年四月、入学式でのあいさつをすませてから、家族とともに名古屋を発ち、シベリヤ鉄道経由でドイツにむかった。帰国後は召集され、戦争時にはドイツ大使館の武官として南京に駐在したことがあった。終戦となり、本国に送還され、ミュンヘン大学の助教授として日本学を講義した。やがて正教授になるが、一九六四（昭和三九）年にはルール大学の教授に招かれて移っている。

ハミツチュはドイツ語教師として来日し、第八高等学校の教壇に立ったとき、先記のように、すでに日本文化研究をはじめていた。松尾芭蕉の研究と芭蕉のおもな俳文の翻訳に取りかかっていたのだが、日本での生活と体験を機に日本文化研究を一段と進展させ、その成果をドイツ語で発表した。とくにライブチヒ、ミュンヘン、ポッフム



に日本学をおこし、日本学をドイツ社会に広める役割をはたした。日本学者としてのかれの偉大さは、大著『アジアの伝統と進歩』<sup>(45)</sup>によくあらわれている。満六〇歳を祝い、同僚および門下生の尽力で一九七一（昭和四六）年に編まれた記念論文集であつて、本文七一二頁という大冊である。世界各国から寄稿された論文が五五編おさめられている。

同書に付された著作目録によると、かれの単著は『茶道』『新古今和歌集』『日本の文化』など七冊、共著は『日本の宗教』など十五冊、翻訳は岡倉天心『茶の本』の訳書が一冊、論文は四十八点、そのほか十一種の刊行物の編者であり、書評・序文その他が一一八点を数えている。<sup>(46)</sup> そのなかには、「ドイツにおける日本学」という論稿があり、これは『ケンペル・シーボルト記念論文集』（二九六六）のなかに収録されている。<sup>(47)</sup>

ハミツチュの日本研究として、「俳文学、とりわけ芭蕉や蕉門に関する研究を行い、優れた論文、翻訳、それに創作を残してきた」<sup>(48)</sup>ことも注目される。一九五〇年代には、「マンフレート・ハウスマン、ヴィルヘルム・グルデント、ゲロルフ・クーデンホーフカレルギーらの学者と並んで、俳文学の紹介」に努めて、六〇年代の俳句ブームのきっかけを作り、「晩年には自ら句作に興じながらドイツ語俳句の普及に貢献した」<sup>(49)</sup>のである。句集としては『丘越え行かむ』や『ホルスト・ハミツチュ、ドイツ語俳句集』<sup>(50)</sup>などがある。

右のうち、帰国後の活躍については、毛利孝一「ドイツ雑記」に詳しい。第八高等学校でハミツチュにドイツ語を学んだだけでなく、日・独に別れてからも親交をつづけたことを綴った回想記である。老年になっても交歓を深め、おたがいの生き方を励ましあっている話もふくまれている。

ハミツチュは「応召中に家財、蔵書など一切を空襲でやられた」。「大学の図書館にも文献が乏しくて、日本学の研究に途方に暮れている」ことを伝え聞くと、毛利孝一（一九〇九―二〇〇二）は「暇をみては本屋をあさって、

注文の本を三冊、五冊と送り届け」て、ハミツチュの日本研究を支援した。<sup>(51)</sup> ハミツチュの盛大な日本研究の陰には日本人の年来の力添えと励ましがあったのである。

ハミツチュは論文ができあがると、毛利に報告することを忘れなかった。その論文抜き刷りには「Meinem Lieben Koichi von Horst」とか「孝」mit herzl. Grüßen von Horst」とか「Meinen lieben Mori-san mit herzlichsten Grüßen」とかの献辞を記した。ハミツチュに漢字をあて「葉道」と署名した献呈論文もある。「謹呈 毛利孝一学兄」と達筆の日本語の献辞もみられる。これら抜き刷りの何点かは名古屋大学博物館に寄贈されて保管されている。<sup>(52)</sup>

#### (四) G・C・アレン 『一英国人教師のみた日本、回顧六十年』(一九八三)

日本経済研究において顕著な成果を残したアレンは、日本回想記とでもいべき一書を著した。名古屋大学の外国人教師による日本回想記ないし日本体験記としては、希有の事例であろうと思われる。

アレンの回想記は左記の著書であつて、ブックカバーおよび内表紙に「一英国人教師のみた日本・回顧六十年」という日本語表題も付されている。

G. C. Allen, *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years.* The Athlone Press, London, 1983.

同書は、本文わずかに一九〇頁という小冊であるが、つぎのような目次から構成されている。このうち第四章「名古屋高等商業学校の学生と教師」において、同校の教師時代が回想されていることが注目される。

第一章 歴史のある名古屋への到着

第二章 名古屋での独身生活

第三章 一九二〇年代の都市と農村

第四章 名古屋高等商業学校の学生と教師

第五章 外国人を観る目

第六章 風習・気分・信条

第七章 災害と社会のあつれき

第八章 娯楽・旅・出会い

第九章 経済成長と社会の発展

第十章 「大日本」と大英帝国

同書といえ、まず第一に、「群を抜いて良質」な日本論、日本人論として知られる。「前半は、感受性豊かなギリスの一青年が、日本という異文化に触れた驚きと喜びとを、じつにみずみずしく描く」。しかも、大正時代の日本社会のたたずまいが「まるで映画をみているように、ヴィヴィッドにわかる」。後半は、「しだいに昭和の日本が話題になる。それを大正と比較すると、おのずから日本の経済発展と、それに伴う社会の変化を議論することになる」、という書評がある。

著者アレンは、たしかに、日本社会のたたずまい、日本の文化や日本人のものの考え方に、深く心を動かされたようで、「日本の実情がよく調べられている」。日本人の生活ぶりや英国経済の斜陽問題などについても、触れられている。<sup>(53)</sup>

第二の注目点は、単なる日本体験記・観察記でないという点である。一九二二（大正一一）年に名古屋高等商業学校教師として初来日して以来、五度の来日体験（一九三六年、一九五四年、一九六七年、一九七九年、一九八〇年）<sup>(54)</sup>を含めた、六〇余年間にわたる「日本と私」をめぐる回顧であるにとどまらず、この間における日本および日

本人の変容ぶりを、西洋とりわけ英国と比較考察しているところに、独自性がある。日英を対比させて、たとえば「日本人が大正時代から現在に至るまでイギリスに好意を持ち続けていたこと、日英両国とも、戦後、帝国を失ったが、日本の知識人の多くは今日の基準で戦前の行為を判断する誤りをおかさなだけの歴史感覚をもっていること、日本は目ざましい経済的発展を遂げたが、技術の進歩や西洋の影響によって古くからの伝統的生活を壊してはいないこと」<sup>(55)</sup>、などという諸点を指摘している。

六〇余年という長期間におよぶ日本論、および日英を対比させた考察という本書にみられる特色は、日本教育の特質理解において明確にあらわれている。概述してみると、つぎのとおりである。

日本の教育制度は特異であつて、英国と比べると、とくに平等主義的であり広範多様であるという点をあげることができる。まず、アレンは、一九二〇年代に学校教師として日本の教育に参与したことから、「日本の教育は、いろいろ欠陥があるものの、英国の制度よりもあきらかに平等主義的であると考えるようになった」<sup>(56)</sup>。英国のプレパトリースクールやパブリックスクールという私学の制度に相当するものはなく、ほとんどの子どもは公立の小学校に通っていたし、「高等学校と大学の在籍者数は、主として多数の志願者のあいだで競争試験をして、その結果で割りあてられた」<sup>(57)</sup>からである。

しかし、そのご考察を深めてみると、「どの程度まで平等主義なのか」について昔いだいていた考え方を修正した。

「日本では、専門職、公務員、金融分野での成功への道は、英国よりも多様性のある社会層の出身者に開かれている」ことは確かであるけれども、公共政策や公共事業、法曹界、私企業の上層部の指導者層の地位は、実は旧制高等学校と帝国大学という特定の学校出身者の手中にあったという点で、「おおまかにいって英国と似ている」<sup>(58)</sup>ように思われる。

ただし、日本では、両機関以外にも、「商工業を生涯の仕事としようする者へ科学・技術・商学教育を提供するために構想された、多種多様な学校、専門学校、大学があった」<sup>(59)</sup>ことが注目される。国立だけでなく私立の学校もあった。明治のはじめから、「この種の学校をとおして、日本は西洋が提供した専門知識をすばやく吸収することができたのであり、日本産業の発展はそうした力に負うところが大きい」<sup>(60)</sup>。

日英の違いは、商工業界の指導者たちの教育歴についてもみられる。日本では、かれらのほとんどは、「高等工業学校、高等商業学校、工学や経済学やそれと同種の科目を専門に教える大学が提供する教育をはじめとする、大学レベルのある種の専門教育をうけた」<sup>(61)</sup>のに対して、英国では、「教養教育を受けた者か、あるいは高等教育をまったく受けていない者たちで占められていた」<sup>(62)</sup>。英国では、「実に長いあいだ、技術や職業の学習は蔑まれたし、科学でさえも軽視されていた」のに対して、日本では、それらが有する実用的な価値が近代化の初期に認知され、大勢の最優秀生が科学技術の研究、とくに工学に引きつけられた<sup>(63)</sup>ということが特筆される。

### 三 外国人教師のみた名古屋大学

#### (一) 名古屋大学回想記

##### (1)

外国人教師による名古屋大学回想記としては、左記のような著作がある。同窓会誌（紙）ないし校友会誌の類いにも、短文ながら、回想記が寄せられているけれども、左記の三点は、それぞれの本務校についてのまとまった記

述が含みこまれている。第一は「公立医学所」の、第二は愛知県立医学専門学校の、第三は名古屋高等商業学校についての回想記である。以下では書誌的な考察にとどめ、それぞれの内容と特色については、項をあらためてのちに詳論する。

① A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan,' *Wiener Medizinische Wochenschrift*, Nr. 15 (Jänner 1877), Nr. 19 (Februar 1877)

② A. Hahn, 'Erinnerungen an die alte Aichi Igaku Semmon-gakko,' 『名大医学部学友時報』一二九—一三三二号 (一九六八年八月一日—一九六八年十二月一日)

③ G. C. Allen, 'Students and Teachers,' in *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*. London, 1983.

第一の報告は、前出のお雇いオーストリア人教師A・フォン・ローレツの筆になるもので、『週刊ウィーン医学雑誌』に掲載された。原題は「日本の医学と医学教育制度」であるが、内容は「尾張の或る財政的に豊かな県」<sup>(65)</sup>すなわち愛知県の医学学校ならびに病院の実態報告であり、同校をとおしてみた日本の医学教育の紹介記事である。

本報告は、医学史家・小関恒雄による現地調査によって発掘されたもので、「外国人のみた明治十年頃の日本の医学学校(下)——愛知医学学校の場合」と題して、『日本医事新報』(一九八七(昭和六二)年五月)に翻訳(一部省略および抄訳)紹介されている。東京大学医学部との対比で、地方にある医学学校の一例として「愛知医学学校」をとりあ

げ、その実情が報告されている。

「愛知医学校」と翻訳紹介されているが、正確には「公立医学所」というべきであろう。ローレツの着任は一八七六（明治九）年五月であり、<sup>66</sup>また本報告は『週刊ウィーン医学雑誌』の一八七七（明治一〇）年一月号および二月号に掲載されたのだから、赴任して一年も満たないあいだの、公立医学所における体験・見聞にもとづく報告と  
いうことになる。

当時、公立医学所は西本願寺別院（現在の名古屋市中区門前町一丁目）に仮住まいしていたが、市内天王崎町の旧千賀氏屋敷跡地（現在の名古屋市中区栄一丁目一七〜一八番）への移転をめざして、校舎および病院を新築中であつた。本報告にも、それまでの純日本的な建物や調度にかわつて、あたらしい洋風の備品や施設を用意しようとする記述が含まれている。

名古屋大学は、一八七一（明治四）年八月、名古屋藩評定所跡（名古屋市中区丸の内三丁目一番）および元町方役所に、それぞれ設置された仮病院および仮医学校を起源とするから、この報告は本学の開校まもないころの様相を伝えている点において、貴重である。

(2)

第二は、ドイツ人教師 F・C・A・ハーン (Friedrich Carl Arnold Hahn, 一八六九—一九四一) による回想記「愛知医学専門学校の思い出」である。

この回想記は、原稿用紙にペンでていねいに手書きされている。『名古屋大学医学部九十年史』（一九六一年）の刊行事業のさいに発掘された史料の一つといわれる。<sup>67</sup>『名大医学部学友時報』の二二九号（一九六八年八月一日）ではじめて公表され、以後二三二号（同年一二月一日）まで、四回に分けて掲載された。<sup>68</sup>

もつとも、活字版ならすでに愛知医科大学予科部会編『鶴陵誌』（一九三三年）に掲載されていた。名古屋大学医学部橋会の発刊になる『橋会誌』が創刊されると、同誌にも、創刊号（一九七七年）から第六号（一九八二年）まで掲載されている。『橋会誌』には『鶴陵誌』が再録されたからである。さらに、『橋会誌』の第五号（一九八一年）および第六号（一九八二年）には、訳文も掲載されたことで、ハーンの回想記は一段となじみ深いものになった。その訳稿は「昔の愛知医学専門学校の思い出」と題されている。訳者は池谷澄夫。ハーンに教わった、同校の一九三二（昭和七）年の卒業生である。<sup>69</sup>

ハーンの回想記「愛知医学専門学校の思い出」は、執筆期日は記されていないが、文中に「一九三一年五月、愛知医科大学は国立名古屋医科大学に昇格し、同時に予科は解消されることになった」、この文章が印刷に廻される時分には、予科はもう存在しないだろう<sup>70</sup>という一文があるから、一九三〇（昭和五）年ころの作と推定される。

前出のローレツが報告した公立医学所は、公立医学校、愛知医学校、愛知県立医学校と改称し、一九〇三（明治三六）年八月には愛知県立医学専門学校として新発足する。一九二〇（大正九）年六月には愛知医科大学となり、それが官立移管されて国立の名古屋医科大学になるのは一九三一（昭和六）年五月のことである。校地も公立医学所時代の一八七七（明治一〇）年七月に天王崎町に移転したあと、愛知県立医学専門学校時代の一九一四（大正二）年三月には名古屋市中区（現昭和区）鶴舞町に新築・移転している。現在、大学院医学系研究科のある鶴舞キャンパスである。

ハーンが愛知県立医学専門学校の教師であったのは一九一〇（明治四三）年から一九一五（大正四）年までであったのだから、本回想記は大部分が天王崎町時代の話である。ただし、かれは一九二一（大正一〇）年から一九三三（昭和八）年まで愛知医科大学予科でも教壇にたっている。校地は、そのころ現在の鶴舞キャンパスに移っていた。



なお、ハーンは愛知県立医学専門学校に雇われていたころ、同時に第八高等学校教師としても教壇にたち、名古屋大学に関与した（前掲の表2参照）。

(3)

第三の回想記は、前出の英国人教師G・C・アレンによるもので、かれの単著『一英国人のみた日本、回顧六十年』の第四章に収録されている。<sup>(72)</sup>一九二二（大正一一）年九月から二年半在任した、名古屋高等商業学校の教師時代の回想記である。

名古屋高等商業学校時代の回想記を含むこの著書は、アレン著として刊行されたが、正確には、アレンの遺稿をもとに上梓されたものである。同書の刊行について、アレンはかなり執着し、執筆は死去する直前まで続けられた。その遺稿が日の目をみるようになったのは、キタン会（名古屋高等商業学校および名古屋経済学部同窓会組織）が中心となって、出版交渉と出版資金の調達に尽力したことによる。キタン会の有志の協賛のほか、アレンの助手であったオックスフォード大学教授M・M・ガウイング（Margaret Mary Gowing）らの協力をうることもできた。<sup>(74)</sup>遺稿が上梓されただけでなく、刊行を記念する講演会が、一九八四（昭和五九）年四月に、東京と名古屋で開かれて<sup>(75)</sup>いる。

### (二) A・フォン・ローレツ「公立医学所の報告」（一八七七）

(1)

本報告は、わずかに二四三〇語ほどから成る短編であるが、①日本近代化におけるお雇い医学教師の先導性について論じたあと、おもに、②公立医学所の実態の報告、③同校お雇い教師としての活動内容の紹介、さらには、④

日本教育への提言、という内容から構成されている。

まず、①日本の近代化におけるお雇い医学教師の先導性について、ローレツのいうには、「日出る国、日本に、学問的に秀れた素養をもった医師達が足を踏み入れた日、外国の文化や学問の到来と常に対立する最初の障壁が待ち構えていた」。とくに、「この国に最初に来朝した人達は、所有欲や征服欲や、その〔宗教的〕異端ゆえに非難され、不信感と険悪な感情で迎えられ、ひどいあしらいを受けて迫害され、追放の憂き目にすら遭った者もいた」。けれども、そのなかにあつて、「学識のある者、即ち学者達は例外であつた」という。とりわけ「外国の医師を他の全ての来朝者よりも寛大に取り扱い」、かれらには、「研究や教育活動に広く大きな自由を認め」ていたのだつた。明治はじめの「日本では、医師が学問に対する先駆的役割を果し、大きな学問的貢献をしている」ことが特筆できる<sup>(76)</sup>。愛知県でも同じであつて、ローレツは同県の医学校に招かれて、「病気の治療に当つたり、教育研究に携わつたり、学問に励む若者達にその手解きをしたりしてきた」<sup>(77)</sup>。そのさい、「すべての役人の非常に好意ある態度」に恵まれた<sup>(78)</sup>ことで、「申し分なくよい仕事」をなすことができた、と次のように記している。

「向学心に燃えた若者達は、迷宮のような中国の綱要から脱出すべき方途を示した新しい〔西洋の〕教師達の許に殺到した。政府もまた、外国の医師を他の全ての来朝者よりも寛大に取り扱い、以前やつて来た人達よりも、研究や教育活動に広く大きな自由を認めた。それで、我々は今日でも申し分なくよい仕事を得ているのである。

日本では、医師が学問に対する先駆的役割を果し、大きな学問的貢献をしている。この国が外国に対して門戸を開いて以来、来日した医師は同時代の他の全ての人達の先達的地位にあり、名藩主<sup>ヤ</sup>や中央政府に招かれて、病気の治療に当つたり、教育研究に携わつたり、学問に励む若者達にその手解きをしたりしてきた。

この医師に課せられた漠然たる要求から次第に発展して、医学校設立の実現を見、ここ数年足らずの間に長崎、京都、大阪、鹿児島、東京、佐賀、函館、名古屋などで活発に講義がなされた<sup>(79)</sup>。

「申し分なくよい仕事」をなすことができた<sup>(80)</sup>と記しているけれども、異文化のなかでの勤務であっただけに、日本人の予期せぬ対応ぶりにとまどうこともあった。すべて根回しをし、数えきれないほどの抜け道を残しておくという「日本人の本性」を知らずに、任地に赴いたので、かれは役人たちの対応ぶりに面食らったと、つぎのように吐露している。

「私は、あらゆる私の希望はすぐに叶えられるという、すべての役人の非常に好意ある態度に少なからず驚いた。感じのよい流儀は、今日も相変わらず続いているのであるが、これは多分ごく例外的なことであろう。

日本人が大抵外国人の願いを聞き入れ、一步一步着実にそれが実現するようにメモをとる、恐ろしい程の礼儀正しさは、経験されたことのある方には解って頂けるであろう。そして、しかも「その願いは」実行されずに、そのままにされておかれるのである<sup>(81)</sup>。」

②公立医学所および病院の実態については、授業ならびに学習の実際、蔵書の内容、医学生の資質、教師の研究と教育を支援する助手たちの能力などについて、報告されている。

ローレツによると、赴任した当時、「医療器具は全く不足しており、包帯も殆ど使える状態ではなかった。教科書は、アメリカ式の間答式便覧書形式のものが数冊あるだけだった。その便覧は、質問と答えの形式に従って、考えうるあらゆる項目を載せており、生徒達はそのすべてを暗記せねばならず、およそ自分自身で考えることなどは不可能だった。」<sup>(81)</sup>

しかも、学生たちは医学的知識が貧弱であるうえに、年齢や学習歴が区々であったので、「クラス編成」すらできなかつたという。

「学生達は解剖学、生理学、自然科学などに関し、既に広く身につけていると私に確言したが、私は一人前の医師として世に出るには、彼らにより高い修練が欠けているという事実を許すことはできなかつた。いろいろな経験から、学生ら当人達が、すべてを知っているというような確信に対し、私は大きな不信感を抱いた。」<sup>(82)</sup>

というのも、「私の前任者「ユングハンス」の講義によって、学生は組織学を済ませ神経生理学まで進んだと称しているが、まだ読み終えていなかった」<sup>(83)</sup>からである。

「前述の問答式教科書のほかには何の本も持たず、教材とてなく、あるいは三カ年間すでに学校で教育を受けた学生中にはいるのだが（一方、やっと六カ月前に入学した者もいる）、私に紹介された学生が六九人以下では、クラス編成もできないならば、どうしてあらゆることについて彼らの結構な言葉を信じることができようか。まして、彼ら学生の最年長は二十七歳、最年少は十四歳で、いずれも外国語を十分こなせず、そのため概説書を一字一字たどどしく読むことで、彼らが欲する知識の全てを得ているような状態であるなら、尚更のことである。」<sup>(84)</sup>

ローレツによると、医学を学ぶかれら「学生達は何の予科的知識もなく、医学本科の知識も予想通りゼロに等しい状態であった。彼ら学生は誰もが等しく碌な知識を持っていなかった」という<sup>(85)</sup>。しかも、学校の蔵書は貧弱であった。そこで、英語の原書を分担で読みすすめ、読み中心の学習方法がとられていた。具体的な授業展開はつぎのようになる。

「手許にある僅かな書籍は、学生達によって何組かに小分けされ、そして、お互いに重複しないように、本の頁

に印が付けられた。たとえば、A君は物理学の二〇五頁から三三〇頁までを「読み」、B君は三三〇頁から四四〇頁まで、一方C君は一頁から二〇五頁まで、などと分担して「読み」通すのである。<sup>(86)</sup>

そのさい、「いくらか英語を話す助教師(Unterlehrer)の助けを借りて、初め学生達は一字一字難儀しながら読み学んだ。それから、読んだものの持つ意味をはっきりさせようと努めた」のだが、「ただ単に読んだだけでは表面的な理解しか得られないという厄介さとか、便覧書からコマ切れの知識の断片をいくら覚えても無意味なことなど、彼らには考えも及ばない<sup>(87)</sup>」というのが実情であった。

このような学習状況であったので、たとえば、「“eine Luftpumpe ist ein rundes Ding” (空気ポンプは丸い物である)とか“ein Barometer dient zur Ableitung der Elektrizität” (気圧計は電気の誘導に使われる)とか、あるいは『蒸気機関(Dampfmaschine)は何に利用し得るか』の問に対し“zu gar nichts” (何の役にも立たない)などという答」すら生まれてきた。しかも、「それら答のばからしさは取り違えや誤解によって生じたものであるが、今まで質されもしなかった」という。したがって、「結局そのような三年間の勉強そのものが、全く無意味だったことになる」と、ローレツはきびしい評価をしている。<sup>(88)</sup>

### ③ 建言・献策

ローレツは、教師の職務に徹しただけではなかった。教師として雇われながら、諸種の計画をなし建言をして政策形成に関与したことは、特筆すべきであろう。一般に「地方の学校教師になった者にはこの種の献策者が多い<sup>(89)</sup>」が、ローレツこそそうした一人であった。病院運営の計画、諸設備の整備、医学書の収集などについて指導している。「新しい病院が完成するまで、院内に患者用に造られた新しい居室に宿泊し、「病院運営」計画を練り直し、基

礎を据えた」と、みずから語っている。<sup>(90)</sup>

そのさい、通訳兼筆頭助手の司馬凌海（一八三九—一八七九）がおおいに当てになった。かれは「教養のある人」であつて、「薬局や手許にある薬品の点検や、ラテン語でラベルを貼る仕事を引受けてくれた」。<sup>(91)</sup>

ローレツのなした業務は、具体的には、まず、つぎのようなものであつた。

「調達品目表を作り、統計をとり始め、すべてが、机上策でなく、本格的に実行に移された。そして八カ月足らずの間に、約四百巻の蔵書と立派な器具類（さらに追加注文予定）を揃え、病理解剖標本も集め始めている」。<sup>(92)</sup>

ローレツの赴任したところといえば、「新しい病院が完成間近い」ころであつて、「二月に移転を開始し、患者は便利で衛生的な病室に移る予定」になつていた。<sup>(93)</sup>

その病院・病室はずいぶん刷新された。「火鉢」（灼熱の炭を入れた無蓋の灰の鉢）の代りに鉄のストーブが備えられた」ので「快適」になつた。しかも、「患者は疾患別に分けられ、重患は特別室に入れられた。薬局も改善し、助手（Assistant）や医師の部屋も自由に使えるよう設備を整え、カルテや資料を整理分類し、勤務のローテーションも編制した」。それに、「病院が担当すべき諸々の業務や、部屋割り、遮光や通風改善のための眼科部門の修理など、当面なすべき処理は迅速に行われた。初めのうち、病院には入院患者は僅かしかいなかった」。<sup>(94)</sup>

「ベッドを調達したり、使用する」ことは当時「大きな難題」であつたが、これは前任者のヨングハンスが「すでに克服していた」のは幸いであつた。

当初、このベッドの使用は「患者には大きな抵抗があつた」ようで、その導入は「全く困難なこと」であつた。というのも、「患者は家では畳の上に横になり、畳の上で日本人の家庭生活が展開する」からである。しかし、医師は畳に「ひざまずいて診察するので、何とも具合が悪い」。「病院では、ベッドは患者にとって無用の長物で、やっ

かいな物であり、患者や助手や付添婦がそれに慣れるのにかなり長い時間がかかる。それで我々が診察の際、真直ぐ仰向けの姿勢や、足を伸して起き上る姿勢などの場合には、何ともやりづらい」ことになった。そのようななか、すでにヨングハンス時代にベッドが調達され、使用されていたというのである。<sup>95</sup>

ローレツの着任時はどうであったかという点、東本願寺掛所（別院）にあった病院・医学校の病室の構造、部屋の作りは純和風であって、部屋は障子と土壁で仕切られ、畳と火鉢が用いられていたことを、驚きの目で、つぎのように報告している。

「個々の部屋はふつう、紙を張った引戸でもって他の部屋あるいは外界から区分される。一方、竹で編んだものを粘土で被って作った、より頑丈な壁は、住宅内の空間を区々に仕切るほどには作り付けられてはいないので、家の中を風がどの方向に流れているかを容易に知ることができる。

夏になると、室内の温度は外気温よりはいくらか和らぎ、部屋は気持よく過しやすい。しかし冬は、部屋はひどく寒く、日本人が手を暖める「火鉢」は居場所をより快適にすることは望めない。それでも、火鉢は日本の唯一の暖房器具で、夜は布団の下に入れて使われる。

このような部屋で、患者は畳の上の布団に横たわり、何枚ものガウンのような衣類にくるまり、時々頭を掛け布団の下で動かしている。<sup>96</sup>」

#### ④ 日本教育への提言

日本人医学生の特質についても、興味ある指摘がみられる。少年期における知識の記憶重視という学習観、漢文で教育を受けた教師、医学生になってからの勉強法という三点を指摘して、つぎのように述べている。

「日本の子どもは、ごく小さいころから、たいてい途方もなく記憶力が発達している。これは、とくに母国語の文字と漢字の学習、国史の学習などによって助長された。この途方もない記憶力に支えられて、いささか年をへて医学校に入学する学生の大半は、それまでに漢文の素養のある教師から教えられたがよくわからなかった医学概念について、洋書を一語一語ゆっくり読み進めるふうにして確かめ、解決して満足する。しかも、当然ながら、『勉学』する術を知らない若い医学生の場合は、たいてい『素読した』本や外国人教師の講義からえた一つ一つの言葉や文章で十分と考えている。」<sup>97</sup>

要するに、「学生は一人残らず然るべき準備教育が欠けていた」といってよい。それであるのに、「自分をかなり高く評価しているので、彼らが言うように、そのような方法で何かちよつと『読んだ』ことで満足してしまうのである。大部分の学生は、そうした仕方では学問の対象を完全に身につけることは不可能であると、本能的に感じていながら、なかには少数ながら、努力を要する研究に没頭しようと試みるものもいるけれども、やはり大部分の学生は、一般的な慣用語や学術的な表現を用いて読んだふりをするだけで満足している。」というのである。したがって、「外国人が何年もかけてきた学問を修めるには、日本人にも同じくらしいの時間がかかるということを、彼らには理解できないのである」と、嘆息することになる。<sup>98</sup> 日本人学生をめぐるこの評言は至言である。

このような認識にたったローレツは、最後に、日本教育に対して、つぎのように提言している。

「医学生が、読んだり聞いたりしたことから、かなり多くのことを理解することができるならば、読んだこと、聞いたこと、見たことがかならず自分の知的財産になるはずである。それで、およそ新しいものへの探求心が生まれるというものである。それ故、最新の書籍・器具・模型あるいは教師が、この日本ではもつとも望まれている。これらは『文明開化』の最新の所産であり、また、これらを所有することは『文明開化』を獲得する



ことにつながることになる。一つの学問をマスターするためには、長年にわたる勉強、きびしい精神労働が必要であるということが、日本人にはまったくわかっていないのである。

日本でいまもつとも必要なのは、一つには「最新の書籍、器具、模型あるいは教師」であり、また一つには「長年にわたる勉強、きびしい精神労働が必要である」ということをしっかり認識することである、<sup>(99)</sup>といっている。日本教育への忠告であり、今なお味読すべき提言であるように思われる。

(2)

ローレツによる右のような「公立医学所の報告」は、名古屋大学の誕生当初の現況報告であり、外国人教師の指導をうけて教育が組織化され学校が編制されていく状況を伝えている、という点で重要である。ひいき目にみるのではなく、冷静な、忌憚のない所見がみられるということにとどまらず、さらに以下の諸点においても注目される。

第一に、ローレツは、外国人教師であったが、教師として雇われてその職務をひたすら遂行しただけではなく、種々の建議・献策をなしていたことが特筆される。本報告は着任当初の報告であり、学校経営と医学教育にまだそれほど大幅な権限を与えられたわけではなかったはずであるが、それでも、右に紹介したように、学校の経営、教育の中身に関与しはじめている。これよりさらにのちになると、かれは学校の編制にたずさわり、学科課程の作成に寄与し、西洋をモデルにしたあたらしい医学教育の組織化に一段と貢献することになる。田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』に詳述されているように、新ウィーン学派医学を移植しようとしたし、愛知県ならびに学校当局に種々の献策をなし、あたらしい医学・医療政策の形成に関与したのである。<sup>(100)</sup>

第二に、ローレツの報告は、前任者のヨングハンス時代の様相を伝えているであろうという点で、貴重である。ヨングハンスは本学最初の外国人教師として、一八七三(明治六)年五月から一八七六(同九)年四月まで在任し、

はじめて西洋医学を教授したという点において、本学の歴史上に輝く人物であるが、本報告では、ヨングハンスの時代における本学の教育環境の不備ならびに医学教育の貧困ぶりが伝えられている。

不備で貧困であったという報告は、当時の公文書や新聞記事、さらには『名古屋大学医学部九十年史』あるいは『名古屋大学医学部百年史』などにおいて、漸新な西洋医学を体現したヨングハンスを迎え入れたことで、病院の声価が高まり医学教育は盛大にむかったという記述がみられるだけに、注目に値する。ローレツ報告によると、実態はそうではなく、教材もクラス編成も不備であり組織だった医学教育など進んでおらず、したがって、医学生は「何の予科的知識もなく、医学本科の知識も予想通りゼロに等しい状態であった」という。しかも、ヨングハンスは「三年ほどして重い神経炎」すなわち「日本人特有の『脚気』という病気」にかかり、在任中の最後の「数カ月間、彼はたまに病院に出勤すればよい」ということまで報じられている<sup>103</sup>。

前任教師の体調不良、教育環境の不備、貧しい教育成果ということ伝えるこの報告は、ローレツの活躍ぶりを一段とひきたたせることになるけれども、当事者による報告であるということに注意しなければならない。ヨングハンス時代の実情についての、史実に裏づけられた考察が求められるであろう。

ローレツ報告の特筆すべき第三点は、近代日本の医学教育の特質ならびに医学生資質についての指摘である。これは、近代日本教育改革に対する提言という性格をおびている。それも、政府お雇い医学教師であったL・B・C・ミュレル (Leopold Benjamin Carl Müller, 一八二四—一八九三) 著述『東京、医学』(一八八八)、E・ベルツ (Erwin von Baetz, 一八四九—一九二二) 著『ベルツの日記』(一九三一) における指摘と軌を一にしているというだけでなく、実は、かれらよりも早く、すでに一八七七(明治一〇)年以前における、体験・観察にもとづく提言であった<sup>104</sup>という点においても、注目したいと思う。

(三) F・C・A・ハーン 『愛知医学専門学校の思い出』(一九三〇)

(1)

ハーンの回想記『愛知医学専門学校の思い出』では、とりわけ、①校舎とその内部、②学生、③学校行事、とくに祝祭日行事、④教師生活、についての記述が注目される。

①校舎とその内部

ハーンが一九一〇(明治四三)年に愛知県立医学専門学校に赴任したとき、「この学校の建物は全く古風で、そのためにかえって興味ある環境であった」という。「外観特に前面は明治の中頃には流行していたが、今は唯絵でしか、とりわけその時分の色彩木版画でしか見ることが出来ないような西欧の建築様式を示していた<sup>(105)</sup>。内部については、「事務室の狭さと設備のみすばらしいこと」が特筆される。事務職員はここで働き、教師も講義のない時ここですごすものがいた。学校と合併された病院の指導者であった熊谷幸之輔教授でさえも、「病院の一般事務室の片隅の質素な机で指令に当たっていた<sup>(106)</sup>」。

そんななか、ハーン用に、「学校と病院の間の建物の二階」に、「休憩と昼休みの居所」が割り当てられた。それは「上記の状況からしては特別によい室」であった。もともと、この優遇措置はハーンを孤立させ、しかもかれの「非社交性の性質のため」もあって、「学校の他の教師、特に医師との触れ合いが少くなり縁遠いものになった<sup>(107)</sup>」。講義室は「現実には合わない」ように思われた。「沢山の教室のある大きな建物の国立高等学校と違って、ここでは講義室が各々独立し、渡り廊下で結ばれ<sup>(108)</sup>」ていた。講義に使用していた二つの部屋は、「大き過ぎたし又可成り暗い」ように思われた。

## ② 学生

学生との関係は、「高等学校と違って大変気軽に感じられた。高等学校では衝突になりかねない強い緊張があったが、ここでは全くそんなことはなかった」<sup>(9)</sup>。第八高等学校と比較したこの記述は興味深い。

気楽に感じられた学生とのこのような関係は、「神経衰弱に悩んでいた」ハーンにとって「大変快適であった」。けれども、「大きな学級でも、ドイツ語の選択科目の方でも、外人としてのみ可能な授業方法では効果を目ざすことは全く不可能であった」。やがてハーンを「意気銷沈させ初めたので、ある日、校長の熊谷教授のところへ行つて、私は給料をお返ししなければならぬような気持ちになっていると言った」ところ、熊谷教授は「『私達の学生は医学の勉強を十分にしさえすればいいのです。彼等がドイツ語の勉強を望もうと望まないと彼等に任せなければなりません。それは残念ながらどうしようもないのです。』」と答えたというのである<sup>(10)</sup>。

「二年間はよくも悪くも悪くもなかったが学生の数は余りにも増して彼等は反抗するようになり始めた。然しその反抗はすべて無能なやり方で目的も不適當だったので、よい結果にはなりようがなかった。これらの結末は一九一四（大正三）年夏の医学専門学校の新校舎への移転とその秋の世界大戦の勃発で尚加速された。鶴舞公園のそばの新しい未だ完成されていない校舎に移つてからは講義はしばしば中止され、充分な教室がなかった」<sup>(11)</sup>ので、同年九月からは、ハーンには「週に唯の六時間しか」与えられなかった。

## ③ 祝祭日儀式

学校行事のなかでも、まず祝祭日儀式が、ついで学校祭が珍しく思われたようで、ハーンは相当くわしく書き残している。

「慣例の祝祭の儀式は天皇誕生日の『天長節』も新年も大講堂がなかったので、大きい教室の中で執り行われた。ここでは東側の壁にとりつけられた神龕かみに似た神棚の中に天皇、皇后の肖像が保存されていた。学校祭と呼ばれている祭には他の学校にも同席したことがあるが、祭としてもり上る感銘は私には何もなかった。稀に例外はあったが、普通の場合は前以って印刷されたプログラムのようなもので、何をいつするかは正確に決って居て、私は興ざめした。祭そのものについても軍隊のような指揮があつて、お辞儀を強い、雰囲気を買つてしまふのであつた。只一つの祭らしいことと言えば私には国歌の斉唱だけであつた。日本人がこんな祭をどんなに感じているか知らないが、私にはいつもその雰囲気に入り込むことができなかつた。既に言つたように例外はあつたが<sup>(12)</sup>」

「最高支配者の訪問」の日も、学校は祝祭日となり、特別の準備がなされた。「それは絶えざる大掃除と飾りつけで初はつまつた。天井と壁は石灰で上塗りされ、戸、腰板、窓枠は塗られ、どんな小さな傷みでも修繕され、又長い間望まれていた大改修も遂行され、高き主が来る道はきれいに掃かれ純粋な砂と砂利が撒かれた。学校全部が一日中準備に忙殺され<sup>(13)</sup>」るため、「講義は一部中止しなければならぬ程であつた」。

当日は、「高貴な客を歓迎するために、教師も事務員も式服で全部門の前に立った。彼等の上では国旗が楽しげにはためいていた」。そのさい、「すべてきちんと彼等の階級に従つて整列し、勝手な行動をとらないように気を使つていた。校長は玄関のそばで、学生は外の道の上で。誰がどこに立っているか一目でよくわかつた。昔ながらの日本の礼儀作法は、学校の中の外人に対しては大変ゆるめられているが、この厳格な宮廷作法の前には屈しなければならなかつた。このことは多くの外人には苦手であつたが、整列や順序を少し覚えさえすれば、いいように私には思えた<sup>(14)</sup>」。一九一〇（明治四三）年一月一九日には、皇太子の学校視察<sup>(15)</sup>があつた。この日、ハーンは同僚の「高塚

教授と共に列の下の方の校門の近くの老公務員のそばに立っていた」が、かれは「山高帽を被って、外人として目だち、日本人の間に木の様に長く聳そびえていなければならなかった」ので、「苦痛であった」と、つぎのように記している。

「皇太子は大勢の従者をしたがえて、皆人力車で来た。皇太子が学校を視察する間、私達は外に立っていた。同様に人力車も車夫も。車夫達は然し門のところの私達よりずっと高い校舎の前に立っていた。彼等は私達を見下していた。待っている間、そこでは全く自然に丈の高い外人が、彼等の娯樂の対象になった。今だから言うけれど、それは自然で悪意ではないにしても、当時の私には苦痛であった。近くに立っていたならば、私が彼等より目立って大きいのを臆測おくそくしてふざけ合っているのが聞えるようであった」<sup>(16)</sup>

#### ④学校祭

この「医学専門学校の年々の学校祭は、当時町の中央にあつた第一中学校の一階で催されるのが常であつた」。その「第一中学校」とは、名古屋市中区南外堀町九丁目五番地に所在した第一中学校（現在の愛知県立旭丘高校）のことである。この学校祭は「年々人気が増して来るので嬉しかった」<sup>(17)</sup>。

一九一四（大正三）年の一〇月二一日に開かれた学校祭では、いわゆる戦時色が濃厚であつた。「戦争の熱狂の高波にゆれて、その雰囲気は祭にまで現われていた」。同年八月二三日に日本はドイツに宣戦を布告し、九月二八日には青島を包圍し攻撃しはじめたという時局を反映して、プログラムのなかに「海戦」を演じた出し物があつたのである。

「学生達は竹と紙で軍艦を作り、その中に入ってこれを動かしていた。それはドイツ色で塗りつぶされ、ドイツ

海軍旗と『カイザー』の名前をつけていた。二つの煙突の下にはブリキ罐の中に火をつけた木片きぎれがあつて、それからほんものの煙が立ち登っていた。このドイツの軍艦は数人の学生に護衛され、その学生達は紙製の小さな軍艦をつけた帽子を被っていた。その帽子にはコレラ、ペスト、チフス等の伝染病の名前をピンで刺し止めてあつた。一方コースの上では、頭の上に魚雷をつけた学生達の障害物競争が行われていた。よく見ることは出来なかつたが、彼等は他の学生によって操縦されているらしかつた。そのコースには水雷とレットルを貼られた厚紙で作った輪状の物がいっぱい置かれてあつた。魚雷の学生はこの水雷にぶつかると、再び出発点に戻らなければならなかつた。この障害物競争の終り頃に、軍艦『カイザー』は、早足でコースに導かれて来て、軍事教練の時のように、発砲と射撃があびせかけられた。そこでこの軍艦は遂に粉々になり、破片は小軍艦ともども火をつけられて、燃えつきてしまつた。<sup>(18)</sup>

このような学校祭は、ドイツ出身のハーンにとつては気が重かつたが、その一方、「祭らしい喜ばしい」学校行事もあつた。「毎年十一月に行われる『医学士』になる上級生の卒業式」ならびに謝恩会であつて、これらは楽しい思い出であつた。<sup>(19)</sup>

この日、「卒業式は学校で午前中に行われ、午後は新しい『医学士』達が、当時二百人から三百人の客を収容出来る唯一の場所の東洋館とうようかんで、先生達のために謝恩会を催した。そこには既に学校を退いた先生達も招かれた。先ず午後一時から客は、西欧風の建築の東洋館の一階に集り、食事の時まで寄席芸人の色々の上演で歓待を受けた。それから皆日本間に行つて日本食を与えられた。その間芸者は舞台上で歌つたり踊つたりした。それは客の多くにとつても、私にとつても又、最も大きい宴会であつた。<sup>(20)</sup>」

学年はじめの始業式も、重要な学校行事として位置づけられていた。始業式では「校長は教育勅語を奉読し、過

去の学年についての報告をした。この報告はいつも遺憾に思うと言う結論で終り、医学生が町では墮落生（放蕩学生）として通っているのもっとよくなるようにとの注意でしめくくられていた。事実その当時は医学生に対してのそういう意見が拡がっていて、何度となく新聞紙上にも論ぜられていた。<sup>(21)</sup>

学生たちの無軌道ぶりは「この間までドイツでも同じようだった」が、「彼等は医師としての輝く理想を持っているのであるから」、それほど問題にする必要もないように思われた。「この小さな大学の町で学生が頑迷固陋の人にどんなに心配をかけようが、夜警や警察官と喧嘩をしようが、集まって口論したり、飲んで騒ごうが、決闘して罪を作ろうが、“filia hospitalis”（注、ラテン語、病院の娘）の歌は空中からはつかめない」はずである。「葡萄の汁が全くでたらめに見えようが、おしまいにはそれでもまことの葡萄酒になる」という、『ファウスト』のなかの言葉を思いだすべきであろう。<sup>(22)</sup>

### ⑤教師としての生活

教師といっても、ハーンは外国人教師であっただけに、次年度の契約のことがいつも気がかりであった。学校の経営状況、さらには時局の動向を気にしながら、教師生活を続けたことがうかがわれる。

まず、一九一四（大正三）年ころになると、同僚から「学校が経済上の極度の節約にせまられているので、来年の四月以降はもう働かせて呉れないだろう」とうちあけられることがあった。しかも、その「少し前日本がドイツへの戦に参加してから文部大臣によって、公立学校のドイツ人教師は、静かに現状を維持するようにと、公表された時だった」だけに、心配であった。愛知県立医学専門学校が解雇となれば、ハーンには第八「高等学校の週二日の講義からの収入が割り当てられるのみ」となってしまうことが気がかりになった。<sup>(23)</sup>



ただし、愛知県立医学専門学校との関係はこれで切れたわけではなかった。ハーンは同校の二・三の医師にドイツ語を教えていたし、かれらがドイツ語で書いた研究論文を添削したりしていたからである。しかし、これらの関係も断たれるときが来た。

いよいよ、一九一五(大正四)年五月二四日に、「医学専門学校からの最後の給料を手に入れて、その日の夕方校長の熊谷教授のところへお別れをしに行った時、彼はお別れに際して何か上げたいのだが、学校の状況はそんなものではないと言った。<sup>(124)</sup>」

そうこうしているうちに、一九一八(大正七)年一二月に世界大戦は終り、翌一九一九(大正八)年の夏、ベルサイユ平和条約が締結された。この間、ハーンは「恐怖感の中に日を過した。高等学校はもう私を雇って呉れなかったし、医科大学の方でも確約をして呉れなかったので、ドイツへ帰ることにして、一九二〇年五月二十五日神戸を発った。<sup>(125)</sup>」

しかしながら、その年の秋、ドイツ滞在中に、「その間に開校された愛知医科大学の予科のドイツ語の教師として再び名古屋へ来るようにとの招請をうけた」。ハーンはこれに応じて、「日本を発ってから正に一年後の一九二二年三月二十六日に再び神戸に着いて、その日のうちに名古屋へ来た。<sup>(126)</sup>」

再来日してみたら、「すべてが変わっていた。医学専門学校は医科大学となり、大学と予科は結ばれて、この予科で……次の十二年間働いたのであった。<sup>(127)</sup>」予科での「次の十二年」というのは、愛知医科大学予科が一九三三(昭和八)年三月三十一日に廃止されるにつき解職されるまでの一二年間のことである。<sup>(128)</sup>

ハーンは、在職中、学内では同僚の教師や医師たちとの「接触が少なかった」けれども、「学校の外では彼等と親しい個人的なつき合いがあった」。魚半<sup>ぎよはん</sup>という料理屋での歓迎会や、同僚を招いた夕食会などを楽しんでいる。「単

なる飲み食いだけでなく、……梅の花咲く八幡やわた(注、知多郡)へ行ったり、新舞子の海しんまいこへ行ったりもした」のである。<sup>(129)</sup>  
そのほか、ハーンに対して「数々の好意」が示されたのだけでも、「何よりも第一に言葉の問題が、人と親しくなるための、大きな障害になっていた」<sup>(130)</sup>。

「言葉のへだたりは、講義に際しても、又学生との交流にも大変妨げになっている」。おおくの外国人教師がほぼ同じ意見であろうと思われるが、ハーンは「三十年間、日本の教職についていたが、同じだけドイツで教師をしていたら知るであろうし、古い日本の教師ならば当然知っているような、沢山のことがらについて何も理解していない。例えば、学校内部の経営について、校長が物事を決める動機について、又日本の教師と生徒の関係、日本の同僚の生活状態、思想、情操についても本当のことは全くわからなかった」。人は「君は然しよく知っているではないか」というけれども、「それはすべて只外面だけのことで、物の内なる本質については、今でさえ本当に何も知っていない」と述懐している。<sup>(131)</sup> 日本に長年滞在し、日本の土となったハーン132の発言であるだけに、外国人教師の悲哀が感じられる。

以上のように、ハーンは、愛知県立医学専門学校から愛知医科大学に至る、「教育施設の素朴な出発から最高の段階までへの昇進」について、エピソードをまじえて記した。外国人教師のひとりとして、この発展に参与し助力できたことは「私達の誇りほこである」と明記し、さらに、ラテン語で、つぎのような詩を謳って、大学、同僚、教え子の発展を祈っている。

「大学よ とことはに、教授諸君よ たからかに、

討論の仲間よ ながらへて、学びの友よ 生き生きと、

いつも変わらず 花の中にあれ」<sup>(133)</sup>。

(2)

ハーンの回想記は「昔の愛知医学専門学校の思い出」という題目であるけれども、医学教育の組織や内容についての話は出てこない。かれは医学教師としてではなく、ドイツ語の教師として（ときにはラテン語教師としても）同校に関与したからである。

本回想記は、そのドイツ語ないしラテン語教育の組織や内容についてよりも、学生および学校行事についての思い出の方が貴重である。具体的にいうと、第一に「ドイツ人の目を通して、明治後期から大正期にかけての日本人医学生の気質や生活」が、如実に記されている点<sup>(134)</sup>がめずらしい。ただし、かつて第五高等学校のドイツ語およびラテン語教師という体験者でもあった<sup>(135)</sup>のだから、同校との比較による観察が期待されるのだが、そのような視点からの記述はみられない。

第二には、祝祭日儀式ならびに学校祭についての記述があり、注目される。学校祭での、時局を反映した「海戦」を演じた出し物の記述は、とりわけ具体的である。卒業式および始業式についても報告されている。このような学校行事の形式と内容をめぐる報告は、その時代の学校教育の歴史的性格を端的に象徴するだけに、貴重な資料となる。

#### (四) G・C・アレン「名古屋高等商業学校の学生と教師」(一九八三)

(1)

アレンの回想記は、原題が示すように、名古屋高等商業学校の学生および教師の生態をめぐる回想が主である。以下では、①校舎、②学生の制服・服装、③講義中心の授業、④課外活動、⑤政治活動、⑥教師への恩義、⑦教師

の献身ぶり、⑧外国人教師への大きすぎる期待、⑨学生の勉学、⑩英語スピーキング・コンテスト、⑪アメリカ映画、という項目にわけて、要述する。

これらの項目のほかに、同校での教師体験をとおして日本教育にも関心がおよび、日本教育制度の特質についても論及されていることは、先に紹介したとおりである。

### ①校舎

名古屋高等商業学校の「校舎は二階建ての木造で、着任した翌年には、コンクリート建築の大きな講堂が増築された。学生のおおくが生活している寄宿舎があり、また広い運動場もあって、その先は広々とした田園地帯だった」と、周囲ののどかな環境を伝えている。自宅からの出校は「着任当初は農地を通して楽しく歩いた」が、任期もおわりに近づいたころになると、「農地の一部は拡大する郊外に飲みこまれてしまった」<sup>(136)</sup>。

学校は、「日欧両語による経済書および文学全般にわたるすばらしい蔵書を所有していた。講義室と職員室の調度や設備は、簡素ではあったが不自由がなかった」<sup>(137)</sup>。

### ②学生の制服・服装

学生は旧制中学の出身者で、一七歳で入学し通常は三年間在学した。「毎年一八〇名から二〇〇名の学生が入学した」ので、「当時の総定員は六〇〇名に迫っていた」<sup>(138)</sup>。

かれらは「紺色の制服を着て、校章のついた制帽をかぶっていた」。外国人にはこの「制服のせいで学生は軍人のようにみえた」が、日本人にとり、「制服の利点は安いことと、裕福な学生にせいたくをさせないということにあっ

た。この制服と頭髪を短くする習慣は、近代日本が封建時代のエリートであった『侍』から受けついで、簡素さの伝統にマッチするものであった」ように思われる。

学生のなかには、「華美を避けるあまり、極端にみすぼらしい格好をする習慣をつくったものもいた。弊衣破帽は、学生であることを示す印となった。しかし、夜になると、とくに夏は、制服をすて和服を好むことが多かった。服装が変われば見た目をかえ、わたしには人格さえ変わったようにも思われた」。

あるとき、学生たちが制服を脱いで素っ裸で教室にいたことがある。それは、登校途中に突然の大雨に見舞われずぶぬれになったからである。「気をきかして着ているものをすべて脱いでしまったので、講義室に入ると、学生は上半身はまっ裸で、座席から膝の上に座布団をのせていただけだった。この異様な光景を見て、わたしは面食らった。というのも、西洋の慣習についてなにがしか知っている学生たちが、一瞬ではあったが、わたしがあきらかに狼狽したのを認めて喜んだからである」。しかし、どんなときでもありのまま受け入れるようになっていたので、アレンは「何もいわずに講義を進めた」<sup>(139)</sup>。

### ③ 講義中心の授業

「たいていの学生は、昼食用に、冷えたご飯、漬物とお茶を持参していた。このような粗末な食事で、かれらは懸命に勉強し、種々の講義からなるきびしい教育課程を受けさせられた。講義が主たる教育方法であった」。その「講義は、大勢を対象にする場合には避けられず、教育における大量生産の例とでもいうものであって、個人的な指導を受ける機会はほとんどなかった」<sup>(140)</sup>。授業は、夏季は朝八時に、冬季は朝八時三〇分に始まった。

着任した「当初は、服装が同じであることもあって、わたしには学生の見分けがつかなかったが、そのうちに学

生の多くは際立った個性を發揮した。ほとんどのものが外国人教師に興味をもち、何人かは根気強く努力して外国人教師を助けてくれた。熱心な学生は自宅に来てくれて、英語の練習をした。<sup>(141)</sup>

学生たちは「学校に対して批判的な面もあったが、校則はきちっと守った。留年する者はほとんどいなかった。留年したのは二人しか記憶にない」。飲酒をおぼえて停学になったもの（そのご学校に戻り、なんなく卒業した）と、「勉学を捨てて信仰生活に専心しよう」とした二人である。<sup>(142)</sup>

#### ④ 課外活動

講義が中心で、学生は「個人的な指導を受ける機会はほとんどなかった」けれども、「個性や個人的な趣味は、課外活動においておおいに發揮された。ある意味では、この課外活動は日本人の生活の縮図であった。というのは、西洋から持ちこまれたものだけでなく、伝統的な競技やスポーツ、芸術活動などが含まれていたからである」。伝統的なスポーツには、柔道、相撲、剣道、弓道があったが、「学生の多くはサッカーや野球やテニスを好んだ」。<sup>(143)</sup>

ほかに「日本音楽と西洋音楽を稽古する音楽同好会もあった。尺八を演奏するものや長唄を吟ずるものがあった。洋式楽器でクラシック音楽や近代音楽を演奏するものもいたが、そのなかでもハーモニカがもっとも人気があった。演劇に熱中する学生も多く、かれらは日本と西洋の両方の劇を上演した」。たとえば、メーテルリンクの『青い鳥』がフランス語で上演されたし、グレゴリー夫人作『The Rising of the Moon』は『月の出』という題名で宣伝された。もっと意欲的な企画もあり、本校教師の作品で、国際関係をめぐる寓意物語が多数の言語で上演されることがあった。<sup>(144)</sup>

「学生が古き日本の劇の一場面を上演するとき、わたしはいつも感銘を受けた。かつての英雄の衣装をつけ、物

腰までもまねるとき、学生はふだんとはちがったところにあらわれてくるように思えた。このような態度や性格が明らかに転換するのを目のあたりにするたびに、わたしはこの国が表面的にどう変わろうとも、古来からの感情はまだ強く流れていると納得したものである<sup>(145)</sup>。

## ⑤ 政治活動

日本人学生と西洋の学生が「大きく異なっていた」のは、日本の学校には政治クラブがみられないし、「公然たる政治活動などなかった」ことである<sup>(146)</sup>。

「日本人学生もけっして政治に無関心ではなく、国際問題はかれらの興味をおおいに喚起した」。とはいえ、「当時の日本の政治制度は西洋の議会制度をモデルとしていたけれども、政策決定に一般大衆が参画する機会などほとんどなかった」。議会政治は民主的ではなかったし、政党があつても、「政治上の主義主張の違いにもとづいてできなかったのではなかった。利害の異なる集団を代表することさえほとんどないといえた」。そこで、「学生が政党との関連で政治クラブを結成するように誘われることもほとんどなかったし、在職時に、学校で政治的な色彩をもった集會が開かれたという覚えがない<sup>(147)</sup>」。

ただし、「公然たる政治活動がなかったからといって、学生が権威に従順であつたわけではない。逆に、かれらは教師や教育政策に対して反対の意志をしばしば表明し、ときには、英国の伝統に育つたものにとってはたいへん衝撃的なやり方で、自分たちの見解を主張することもあつた」。英国では、学生の不穏な動き、大学のなかの暴力、高等教育機関の運営への参加を学生が要求することは、夢想だにされなかつたのに、「日本には、そうしたものがすでに到来していた。教師は学生から、西洋でみられる慣習よりもはるかに尊敬をこめた扱いを、普段から受けていた

にもかかわらず、学校当局は、どんな不満であれ大小にかかわらず、学生の不満があらわれるとすぐに動揺した。人気のない教師の地位は不安定であって、ときおり学生は情け容赦なく不満をあらわにしたものである。<sup>(148)</sup>

着任直後にみた書類には、「学校当局が学生集団をおそれているようであったし、たとえ教師にあきらかな非があるわけでないような状況でも、学校当局は抗議する学生から教師を擁護してくれるとは期待できなかった」ことが記されていた。実際、着任したころ、校長から「なによりも学生を満足させなくてはなりません」と言われて、おかしく思った。<sup>(149)</sup>

ある年の卒業式で、「最終学年の学生の幾人かが、卒業式にふさわしい型どおりのスピーチをするように求められたのに、学校とカリキュラムと教授方法についてきびしい非難をはじめた。旧制中学においてさえも、人気のない教師の免職を求めるストライキは珍しくなかった」。私学の早稲田大学では、学生たちが軍事関係科目の導入に反発した。名古屋高等商業学校は官立学校であったので、「いわゆる軍事教練と呼ばれる授業の時間が割りあてられていたが、この授業の軍事教官はおおくの学生に侮蔑の態度で迎えられた。これはその人に人格面で欠陥があったからではなく、ただそうした職にいたからであった。というのも、その教官は魅力的で控えめな人であった」。<sup>(150)</sup>

アレンの在任当時は、明治以来の専制的な政治制度が批判にさらされ、「日本史上はじめて、政党の党首が首相に選出されたので、議会政治の時代が始まるうとしているように思えた」。一九二五（大正一五）年に普通選挙法が可決されると、学生は「心からこの傾向を支援したし、躊躇することなく自分たちの意見を世間に表明した」。しかしながら、権威に対する学生の抗議は「何か特別な面での欠点があれば、それに抗議をしてきたし、教育制度のなかに実際に欠陥があれば、それを突いていた」。<sup>(151)</sup>

「権威主義的な伝統のなかで育まれた大衆には、一貫した政治的イニシアティブなど期待できなかった」のだ



から、「不満と批判を表明することは、社会のなかでもっとも自立していて、学問があり、はっきりとものが言える集団である特権的な学生層によるものであった。もっとも明白な攻撃対象の一つが、教育制度であった」<sup>(152)</sup>。

#### ⑥教師への恩義

学生たちは学校を非難し政治や権威に抗議をしたのだが、卒業したら「そうしたかつての不満はながらく忘れてしまう」。年輩になると、「学生時代を郷愁と感謝の気持ちで回顧し」、母校に強い愛着をもつようになる。それは、卒業生の大半が「日本の経済発展——そうした経済成長にかれら自身が貢献した——の波に乗って事業家や専門家として成功した人たちであった」ことにもよるであろうが、それだけではない。「日本人の生き方には、集団に対する忠誠心と相互の強い恩義の情が浸透している」からだと思われる。「他人からいったん恩義を受けたなら、たとえそれがどれほどんざりするようなものであろうと、かならずお返しをしなくてはならない。学生は恩師に生涯借りを負っている」というのである。そこで、「かれらは同窓会組織を活発に支え、機会あるごとに恩師に感謝の意を表し、暖かいまなざしを送る」ことになる<sup>(153)</sup>。

#### ⑦教師の献身ぶり

教師への期待は実に大きく、教師は学生からも市民からも敬意をもって遇された。

「日本の教師は、研生活と個人生活の両面において、高い水準を保つことが期待されているといわなくてはならない。教師たるものは一般大衆より優れているべきであることを求めた儒教の伝統が、教師の行動を型にはめてしまったことは確かであろう。ときおりいろいろ問題がおこったけれども、学生は尊敬の念をもって教師

に接したし、教師の方は、偽善者や術学者がなかにはいたとはいえ、概して献身的で良心的な人たちであり、学生への責任は英国の教師よりもはるかに広範にわたっていた。<sup>154</sup>

このような責務は、教師に「ときおり過度に重い負担をおわせることがあった」。休暇を取ろうとしたとき、学生が事故で怪我をしたという知らせが入ったら、英国だったら学生はそのまま放っておかれるであろうが、日本の教師は「自分の計画をあきらめて学生のところにかけてつけなくてはならなかった」。<sup>155</sup>

「学生の福祉に対する教師の献身ぶりは、同じ日本人も認めるところであつて、おそらくこれこそが、教師が安い報酬にもかかわらず、高い人望をえた理由の一つであろう」と思われる。あるとき、教師への敬意がいかに甚大か、実際に体験したことがある。市電のなかで隣に座っていた男性とどこへ行くのか、どこから来たかといったあたりきりの会話をかわすうちに、「名古屋高等商業学校で教師をしています」といったら、「その人は立ちあがつて帽子を取り、お辞儀をして、たいへん敬意のこもった口調でわたしの返事に応えた」というのである。<sup>156</sup>

#### ⑧ 外国人教師への大きすぎる期待

アレンの在任時、「名古屋高等商業学校には、英国人が二名、カナダ人一名、アメリカ人の体育教師一名、ドイツ人一名、中国人一名、それにロシア人女性が一名いた」。そのうち、外国語の教育にたずさわるものがとりわけ多かった。

「外国人教師はなんでもこなすことが求められた」が、ほとんどの日本人教師は、とくに経済学の教師は「きわめて専門化していた」。いまでは専門化がかなり進行しているけれども、「当時はあまりみられなかった」。しかも、そうした「担当領域の限定を日本人教師が喜んで受け入れたことは、驚きであった」。<sup>157</sup> かれら外国人教師は、「日本

人の同僚が、どの教科であれ外国語を読むのにてこずると、いつも説明を頼まれた」。とりわけ「現代英文学や戯曲のなかで遭遇する口語体は、当然ながら日本人の読者にとっては難問であった」ので、よく質問を受けた。「Abso-bloody-intely (ぜええーつたいに)」といったような単語に出あうと、「この単語は辞書にはないのですが」と愚痴をこぼされた。「当時日本人のあいだで人気作家であった」J・ゴールズワージー (John Galsworthy, 1867—1933) 作のあの戯曲のト書きについても、教えを乞われたことがある。<sup>(158)</sup>

かならず対応できるわけではなかったが、それでも、アレンは「ヨーロッパ文明のいろいろな面について知らないと告白すると、相手を驚かせたり、わたしのことを軽く否定されることもあったので、最善を尽くした」。そのため、「授業という日常の仕事が、この種のちよつとしたでき事ではしばしば中断されてたまらなかつた」。<sup>(159)</sup>

#### ⑨ 学生の勉学

学生たちは、経済学と商学の関連科目に主たる関心をもっていたものの、「すぐれた一般教育も受けていた。英語の学習が授業時間の多くを占めた。この英語学習をとおして、かれらは西洋の経済学者の著作のみならず近代文学にも親しんでいた」。ただし、ときには「学習用の著作の選択には驚ろくこともあった。ラスキン、ステイブソン、ゴールズワージー、ショール、イプセンと、妙な組合せであった」。<sup>(160)</sup>ときおり、英語のスピーキング・コンテストも開かれていた。

#### ⑩ 英語スピーキング・コンテスト

英語のスピーキング・コンテスト(雄弁大会とも呼ばれた)は、学内者だけでなく、「近隣のさまざまな高等教育

機関からも出場者がやってきて、競いあつた」。外国人教師と日本人教師が審査員になり、審査がおこなわれた。人気があつて、いつも学生や大人たちが大勢聴きにやってきた。「出場者たちは、自分の先生に手伝ってもらつて多様なテーマの原稿を用意し、何週間もかけてスピーチの練習をした」、うえで大会に臨んだ。<sup>(161)</sup>

このコンテストは、外国人教師であるアレンにとって、「いままで知らなかった日本人の特性の数々を垣間見せてくれた」いい機会になった。

「まず、日本の若い青年男女には、あたらしい知識と適性を求めるなかで粘り強さと真剣さのあることが、はっきりみられた。学生は上達のためには努力を惜しまなかつたし、他より学問にぬきんでようと決意していた。第二に、日本の若者たちが、大勢の口やかましい人たちに直面しても、動ぜず悠然としている態度には感心した。いつもはにかむのにそれを克服して、ものおじせず自分の意見を堂々と述べたのだつた。

また、このコンテストでわたしが悟つたことは、苦痛であることをはつきりとあらわさずに退屈さに耐えるという、驚くべき能力が日本人にあるということであつた。スピーチは延々何時間も続いたが、それでも聴衆の多くは、おそらく何が話されているのかほとんどわからないであろうに、座つて楽しげに聴いているようであつた。<sup>(162)</sup> しかも、コンテストでは、「欧米の観察者にはあまり感心できないように思われる特質」も明るみになつた。あるとき、近所の高等女学校から来た出場者に一等賞が授与されたが、男子学生はこれにひどく腹を立てた。その理由は、「女性の味方をする審査員の判定のせいで、男のメンツがつぶれた」からであり、また「『動物に優しくしよう』という論題は、公事や公衆道徳をあつかった自分たちの高尚な発表論文と比べてあまりにも幼稚だ」、というものであつた。<sup>(163)</sup>

また、他日、「話す英語がほかのだれよりもはるかに優れていた」から、その学生を学校代表として選ぶべきだと提案したら、「かれはまだ二年生だからという理由で同僚の教師たちに却下された。二年生が他を差しおいて拔擢さ

れたとなると、三年生の自尊心に傷がつくであろう」というのである。結局は、できの悪い生徒が選ばれてしまった。「かれは不出来に終わったが、これは日本人のスポーツマンシップの解明にはつきりと役立つ結果を生んだ。つぎのコンテストへの参加問題が持ちあがったとき、校長はかならず勝てるというのでないなら出場者を送りこんではいけなと断言した。だから、校長は賞をとるよりも試合に参加することが大切だというばかげたことに対して、意義をみいださなかつたのは明らかである」<sup>(164)</sup>。

英語のスピーキング・コンテストをめぐる以上のような出来事は、ささいなことであるが、「日本人は勝利をおさめることをいかに重要視しているかを示す例」として注目される。「日本人の忍耐力やぬきんでようとする固い決意が、それ以降のすばらしい業績の源泉であることに疑いの余地はない。一九二〇年代には、日本人は他国民よりも優れていると自分ではひそかに確信していたが、このことは他国では認められていないことをわかつていた。だから、かれらはささいな侮辱にもすぐに立腹し、失敗することは大きな恥と考えるようになった。ここ四〇年間に評価された申し分のない成功をとおして自信をえ、健全な平衡感覚をえたように思われる」<sup>(165)</sup>。

コンテストにかかわったことで、「日本人の態度についてさらに洞察を深めることができた」。出場者は、指導の先生に助けられて自分のスピーチの草稿を作ることになっていたのだが、ある出場者が、アレンがかつて『ジャパ・クロニクル』紙に寄稿した記事(無署名)を自分の作品として用いていると聞いて、「自分の貢献度の信頼性を信用していた気持ちが揺らいでしまった」。しかも、「会の司会をつとめた日本人の教授にそのことを諫めたら、その人はまったく動揺せず、出場者のあいだで盗用はよくあることで、了解するようにと述べた」、というのである。<sup>(166)</sup>

「日本人の特性」は、入学試験の採点をとおしても実感した。採点のさい、アレンがある志願者に低い点をつけるとき、「同僚の日本人教師の一人が狼狽し、『こんな点数を出すわけにはいかない』『これはX(有名人)の息子な

んだ』と言った」。このとき、アレンは相当なショックを受けた。しかし、「よく考えてみると、審査員に向かつてそのような理由で評定を変えるべきであると提案することなど、英国では考えられなかったけれども、しかし、大  
学によっては、特別視されるある特定の志願者に入学資格を与えることになったかもしれないと思うようになった。」<sup>(16)</sup>

#### ⑪アメリカ映画

「一九二〇年代に、昔の生活様式がみすてられつつあった世界の諸地域では、アメリカ映画がたいへんな影響力をおよぼしていた」。名古屋高等商業学校でも、学生はアメリカ映画を「たいへん真剣に」とらえた。誘いを受けて一緒にみに出かけたこともある。

もつとも、「地元の映画館は、ハリウッドで製作される映画のうちでも、もつともばかげていてもつとも退屈なものばかりみせていた。それでも、学生たちは、西洋の生活様式についてもつとよく知りたいと思っていたので、熱心にみたのだった。わたしならわからないところを説明できるので、学生たちはわたしと一緒にしてくれるようしばしばせがんできた。そこで、ときにはかれらの誘いに応えたけれども、映画の上演は五、六時間が普通で、いつもそんなに長く陳腐な映画に耐えることができるわけではなかった。わたしは行かないようにいろいろな言い訳をした。直接断ると不快な思いをさせるであろうから、こうした場合、もつともらしい言い訳を探さなくてはならなかった。」<sup>(16)</sup>

#### (2)

アレンによる右の回想記は、名古屋高等商業学校の、大正時代の様相を伝えている。既述のように、六〇余年におよぶ、日本との個人的な関係と交流を綴った著書のなかの一章である。同校の教師生活は「回顧六十年」のほん

の一こまであり、六〇年も前の思い出の記であることもあつてか、記述が具体的にでないところがみられる。そのなか、いくつかの特筆すべき点がみられる。

まず第一に、学生および教師の生態についての記述が、出色である。たとえば、①英語スピーキング・コンテストにおける代表者選出ならびに審査結果の決定のさいにみられた、学生・教師・校長それぞれの対応ぶりは、生々しい発言内容も紹介されてあざやかである。②アメリカ映画への関心および盛んな課外活動といった、学生文化も伝えられている。学生たちがアメリカ映画に強い関心を示し、内容が陳腐で上映時間が五、六時間と長くても「熱心にみた」のは、かれらが旧式の生活を捨てて、「西洋の生活様式についてもっとよく知りたい」一念であつたからである、と意義づけられている。

③授業では「個人的な指導を受ける機会がほとんどなかった」なかにあつて、課外活動が、個性や個人的な趣味が「存分に発揮された」機会として注目されている。その課外活動には和洋の数々の種目があつた。かれらは西洋の演劇に意欲的であつたが、その反面、日本伝統の劇へのかれらの取り組み方をみると、「国が表面的にどう変わるうとも、学生たちには古来からの感情はまだ強く流れている」ことを、アレンは痛感することになる。そのほか、④学内学外の権威や規則に対する学生たちの抗議行動や政治活動も、英国の学生に比べて、特異な生態として、それほど詳細ではないけれども、紹介されている。

第二に、課外活動の意義に着目し、種目や演題を具体的に示しているけれども、授業の実際については言及するところが少ない。アレンは、英語および商業学、さらには商業史を担当する教師として任用され、教育の実践が主務であつただけけれども、授業について触れられるところは少ない。商業史の授業では、恩師アシュリーの著書『イギリスの経済組織 (The Economic Organisation of England)』<sup>169</sup>を教科書として用いたとか、「懇切で分り易

い講義であった」とか伝えられてはいるが、授業の実際、学生たちの受講ぶりといった興味ある実相は描かれていない。商業学あるいは商業史というあたらしい専門科目の授業であっただけに、興味ある回想事項となっただけでなくある。

第三に、研究活動についても詳しい記述がみられないが、これについてもとうぜん関心がもたれる。専門科目を担当したのだから、その教育実践を効果的に進めるための研究はどうであったかという点からの関心のほかに、主たる事由は二つある。

その一は、名古屋高等商業学校では早くから研究指向がみられたことである。早くから多彩な外国人教師を擁していただけでなく、「他の同学には見ることでできない、異質の毛並みを持った外人教師を多数送り迎えした」ことを誇りとしたし、「語学よりはむしろ専門の経済学関係の学究」が相ついだ。アレンのほかにも、アメリカのE・F・ペンローズ、英国からA・アシュトンといった、「世界に有名になっている人々が踵をつらねて、名古屋高商へ来た。いずれも生徒とともに各専門の分野で調査研究を行い、多くの業績を残している。」と伝えられている。そのような研究環境のなかにあっただけに、同僚の外国人教師の実像はもちろん、アレンの研究活動については興味深いものがある。

その二は、アレンは英国における日本研究を経済史の面でリードすることになるが、そもそも日本経済への関心は、若いころの名古屋での教師時代に「由来した」といわれるからである。日本経済研究へむかう端緒や経緯をめぐる話は、とうぜん期待されていいであろう。

最後に、アレンの回想記は日本と英国、在任当時と現代をひんぱんに対比させて展開しているところが注目される。学生の政治活動、学生に対する教師の献身ぶり、入学試験の採点、教師への期待と敬意、教育制度などについて



ての記述がそうであつて、これは、既述のローレツならびにハーンの回想記にはみられない特色となつている。

#### 四 まとめ

名古屋大学は、一八七一（明治四）年八月に設置された仮病院および仮医学校を起源とすると、すでに開校まもないころから外国人教師を招聘していた。以来、前身校ならびに包括学校に、いくつかの国から何人も外国人教師が招かれている。

かれら外国人教師に期待された第一の任務は、専門教育ならびに語学教育の教師としての実践であつたが、学校経営ならびに学事についての献策にも関与して顕著な貢献をしたものもいた。日本滞在記の執筆をとおして、世界への日本紹介を推進した場合もあつた。

そのなかには、勤務した学校の回想記を残した教師もいる。回想記を執筆することは、予期されていなかった成果であるが、名古屋大学の歴史像を構成するうえですこぶる貴重な記述が含まれている。なかでも、オーストリア人教師ローレツによる「公立医学所の報告」、ドイツ人教師ハーンによる「愛知医学専門学校の思い出」、英国人教師アレンによる「名古屋高等商業学校の学生と教師」は、本学の前身校ならびに包括学校に関するまとまった回想記として注目される。

これらの回想記では、校舎や施設設備、教育の内容と方法、教師と学生の生態、課外活動や映画鑑賞といった学生文化など、そのときどきの実態が伝えられている。本学の正史である『名古屋大学五十年史』や、部局史には記されることの少ない、教師ならびに学生の生態をはじめ、興味深いエピソードの類いが含みこまれている。これら

外国人教師による回想記は、学生が綴った回想記とともに、名古屋大学の歴史像を一段と豊かにする（とくに裏面史を構成する）重要な資料となりうるのである。

本稿では、以上のような考えから、戦前の外国人教師が残した回想記の内容と構成を、できるだけいいねいに紹介することを主眼においた。それぞれについて特筆すべき諸点を指摘し、その意義についても検討を加えてみたが、それらの特色あるいは意義は、さらに他大学における同類の学校と比較考察することで、一段と明確になるはずである。埋もれているであろうその他の回想記を発掘することとともに、今後の課題にしたいと思う。

## 注

- (1) 正式名称は「国立又は公立の大学における外国人数員の任用等に関する特別措置法」。
- (2) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、一九七五、四九三頁。
- (3) 旧制高等学校記念館ギャラリー企画展「お雇い外国人教師展―クラーク博士来日一二〇年記念」パンフレット、一九九六年八月、一頁。
- (4) 拙著『名古屋大学最初の外国人教師、ヨングハンス先生とローレツ先生』（名大史ブックレット五）名古屋大学史資料室、二〇〇二、参照。なお、大正時代になると、前身校である愛知医科大学の招聘に応じてミハエリス (Leonor Michaelis, 一八七五―一九四九) が来日、一九二二（大正一一）年から三年間在任して、生化学を担当した。「新設まもない同大学生化学教室にドイツから実験器具や医学書等を取寄せるなど、最新知識の導入に非常な功績があった」ことで知られている。竹内博編著『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』日外アソシエーツ、一九九五、四七七頁。名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史一』名古屋大学、一九八九、七二七―七二八頁。

八木國夫編『ミハエリス教授と日本』（ミハエリス会、一九七三）には、招聘の事情と経緯、愛知医科大学における対応、講義

- の内容、研究の成果、日本生化学史上の意義などについて触れられている。「愛知医科大学における研究報告」一覧も収録されている。また、外務省記録『外国人雇傭雑件 本邦諸学校之部 大学之部』の愛知医科大学の項には、契約条件一覧が、山崎正董同大学長が内田康哉外務大臣にあてた書状（一九二二年六月三日付）の添付資料として、収録されている（外務省外交史料館蔵）。
- (5) 吉川卓治「名古屋大学の源流についての覚え書―明治四年仮病院・仮医学校の設立時期の再検討―」『名古屋大学史紀要』第三号（一九九二年九月）一五七―一七三頁参照。
- (6) 同校は、「科学的研究（商業化学・商工心理学等）」と学理の実際化（商業実践と二カ国語の修練）」を目ざしており、外国語学習については「英語の修練に徹底せしむると共に、独・支・仏三外国語中の一つを選択せしめ」ていた。名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史一』前出、四二―四三頁。同『名古屋大学五十年史 通史一』一九九五、三〇三頁。『劍陵十周年史』其湛会、一九三二、六頁、その他参照。
- (7) 『名古屋高等商業学校一覽自昭和十八年至昭和十九年』名古屋高等商業学校、昭和十八年十一月五日、七九、八八―九六頁、その他。表中、ハーン、ブーズ、ウィルメス、マッケンジーの四名の官職は「講師」、その他は「外国人教師」。また、ハーンの氏名表記は、同『一覽』では「アルフレットハーン」とあるが、「アルノルド・ハーン」と修正した。
- (8) かれら外国人教師は多士済々であった。那須秀一編著『劍陵今昔物語』（其湛35周年記念祭実行委員会、一九五九、一六一―二〇頁）や武藤康平「FOREIGN PROFESSORS への追憶」、高島勇「アレン先生の思い出」（『東京キタン会史』東京キタン会、一九八七、二二八―二二九、二二三―二二七頁）などには、何人かの人物像が素描されている。
- (9) 『第八高等学校一覽 第二年度自明治四十二年至同四十三年』第八高等学校、明治四十三年一月、一〇七―一二二頁から『第八高等学校一覽 第三十五年度自昭和十七年至同十八年』第八高等学校、昭和十七年十月、一三五―一四四頁に至る「職員」欄より作成。表中、ハーン、リーランド、スペンサーの三名の官職は「講師」、パークヒルは「運動競技師範」、その他は「外国人教師」である。
- (10) 三好信浩『日本教育の開国 外国教師と近代日本』福村出版、一九八六、二四二―二四六頁。
- (11) 同右、二六五―二六八頁参照。
- (12) とくに、同右、二六七―二六八頁。三好信浩『ダイアリーの日本』福村出版、一九八九、二〇―二二頁、参照。

- (13) J. Murdoch, *A History of Japan, Office of the "Chronicle"*. Kobe, 1903, & Kegan Paul, London, 1925. do., *A History of Japan*, 3 vols., Routledge, London & N. Y., 1936. 竹内博編著『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』前出、四六九—四七〇頁。
- (14) R. Storry, *A History of Modern Japan*, Penguin Books Ltd, Harmondsworth, 1960. 松本俊一訳『日本現代史』時事通信社、一九六一。本書は「明治から今日までの日本の思想や政治外交の移り変わり」が描かれている(同訳書、二四四頁)。ストーリーには『*The Double Patriots: A Study of Japanese Nationalism*, 1957とらう日本研究書もある。
- (15) T. Balz, *Erwin, das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan*, Stuttgart, 1931. トク・ヘルツ編(菅沼竜太郎訳)『ヘルツの日記』上・下、岩波文庫、一九七九。E. W. Clark, *Life and Adventure in Japan*, American Tract Society, N. Y., 1878. E. W.クラーク(飯田宏訳)『日本滞在記』講談社、一九六七。
- (16) R. スミス『日本滞在記』英宝社、一九七二。R・クラウダー(渡辺章子訳)『わが失われし日本、五高最後の米国人教師』葦書房、一九九六。
- (17) 『名古屋高等商業学校一覽自大正十一年至大正十二年』名古屋高等商業学校、大正十一年十一月、四八頁。『名古屋高等商業学校一覽自大正十三年至大正十四年』同、大正十四年一月、七二頁。
- (18) V. H. H. Green, *The Universities*, Pelican Books, 1969. pp. 119-120. 安原義仁・成定薫訳『イギリスの大学』その歴史と生態』法政大学出版社、一九九四、一三九—一四〇頁。
- (19) 大英帝国では、バーミンガム大学よりも六カ月前に、アデレード(Adelaide)大学に商学課程が開設されている。M. Gowing, 'George Cyril Allen 1900-1982,' *Proceedings of the British Academy*, Vol. 71 (1985) p. 475.
- (20) M. Gowing, *ibid.*, p. 475. S. Metzger-Court, 'Japanese Birthday: Taishō II, G. C. Allen (1900-1982) and Japan,' in Sir H. Cortazzi & G. Daniels eds., *Britain and Japan 1859-1991, Themes and Personalities*. Routledge, London & N. Y., 1991, p. 262. 大山瑞代訳『英国と日本』架橋の人びと』思文閣出版、一九九八、四三〇頁。
- (21) S. Metzger-Court, *ibid.*, 大山瑞代訳、同右、四三二頁。英国の商学教育史におけるインテリジェンシーの意義について、T. Nishizawa, *Marshall, Ashley on Education of Businessman and 'Science of Business'?*—*Marshall's School of Economics in the Making*

——(一)橋大学社会科学古典資料センター Study Series No. 48) 二〇〇二、とくに第四章に詳しい。

(22) V. H. H. Green, *op. cit.*, p. 121. 安原義仁・成定薫訳、前出、一四〇頁。バーミンガム大学における商業教育の進展とアシユリー教授の指導性について、M. Sanderson, *The Universities and British Industry 1850-1970*. Routledge & Kegan Paul, London, 1972 の Chap. 7, The Arts of Commerce 1890-1914. に詳しい。

(23) S. Metzger-Court, *op. cit.*, p. 262. 大山瑞代訳、前出、四三二頁。アレン自身も、後出の自著 (G. C. Allen, *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*. The Athlone Press, 1983, pp. 1-2) において、日本政府は高等商業学校の英国人講師の雇い入れについて、「アシユリーに候補者の推薦を依頼した。それから二五年のあいだに、バーミンガム大学の数名が選ばれてその席を埋めた」。アレンもアシユリー教授の強い勧めで赴任してきた、ということをも明記している。

(24) B. M. D. Smith, *Education for Management: Its Conception and Implementation in the Faculty of Commerce at Birmingham Mainly in the 1900s*. Centre for Urban and Regional Studies, University of Birmingham, Research Memorandum, No. 37 (Oct. 1974) には、バーミンガム大学商学修士(一九〇二—一九一四年)六名、同商学士(一九〇二—一九〇九年)一八名、その他の注目すべき学生二六名の一覧表が付されており、ここに四名の日本人(たさかしんじ、平尾丹治、三井高精、三井弁蔵)の名前がみえる(五一—五五頁)。ただし、手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房、一九九二)には、平尾丹治(一八七五—?)の留学記録のみ収録されている(二五四—二五五頁)。

(25) M. Gowing, *op. cit.*, p. 475.

(26) E. Ives etc., *The First Civic University: Birmingham 1880-1980, An Introductory History*. Birmingham U. P., 2000, p. 202. なお、S. Metzger-Court, *op. cit.*, p. 262. 大山瑞代訳、前出、四三二頁、G. C. Allen, *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*. *op. cit.*, pp. 117-118 に参照。

(27) アレンの生涯と活動歴については、M. Gowing, *op. cit.*, S. Metzger-Court, *ibid.*, 大山瑞代訳、同右。G. C. Allen, *ibid.*, などを参照。

(28) J. Fatwell etc. eds., *The New Palgrave, A Dictionary of Economics*. Vol. 1 (Macmillan, London, 1987) pp. 82-83.

(29) 'List of George Allen's Published Works,' in M. Gowing, *op. cit.*, pp. 488-491. 中には七四点の研究業績がまとめられている。内訳は単著一四点、共著二点、小冊子・報告書九点、論文・寄稿論文その他四八点。

(30) S. Metzger-Court, *op. cit.*, p. 265. 大山瑞代訳、前出、四三四―四三五頁。

(31) S. Metzger-Court, *ibid.*, pp. 265-267. 大山瑞代訳、同右、四三六―四三七頁。

(32) 外務省経済局経済統合課訳編『貿易戦略における日本の地位』外務省経済局経済統合課、一九六九。上田宗次郎・山鹿俊一郎訳『イギリスの産業経済、20世紀における経済変化』ミネルヴァ書房、一九七二。G・C・アレン、西山千明『日本経済を考える、イギリス経済との比較から』講談社（講談社現代新書）、一九七六。

(33) S. Metzger-Court, *op. cit.*, pp. 264, 266-267. 大山瑞代訳、前出、四三三、四三六―四三七頁。

(34) S. Metzger-Court, *ibid.*, pp. 267-269. 大山瑞代訳、同右、四三七―四三九頁。

(35) S. Metzger-Court, *ibid.*, 大山瑞代訳、同右。

(36) 国際交流基金賞の授章理由には、つぎのようにある（高島勇「アレン先生の思い出」前出、二二五頁より再引）。ほかに、「国際交流基金賞に岩村氏ら」『日本経済新聞』一九八〇年九月二八日、二四頁も参照。

「英国に於ける日本研究家の代表の一人。若くして日本を訪れ、以来その関心は日本から離れることが無かった。特に経済分野における日本経済の発展に関する多数の著書は、欧米の読者に日本の実像を知らせ、日本理解に多大の貢献をなした」。

(37) 以下の契約経緯、契約内容、および履歴書は、『本邦雇傭外国人関係雑件 高等学校ノ部』第一卷（外務省外交史料館蔵）所収の外交史料による。

(38) 同右。

(39) 『第八高等学校一覽 第二十七年度自昭和九年  
至昭和十年』第八高等学校、昭和九年、一二八頁その他。

(40) 毛利孝一『命ふたたび』中日新聞本社、一九八二、二七五頁。

(41) 青木幸一郎「あの頃の新任の先生方」『やつるぎ』五二四号（一九九九年五月一日）四頁。

(42) 八高創立六〇年記念事業実行委員会編『瑞穂丘物語』八高創立六〇年記念事業実行委員会、一九六八、九九―一〇〇頁。

- (43) たとえば、ウイヤム・セームズ・ミチエル「英語教授法に就いて」、旧制高等学校資料保存会編『旧制高等学校全書』第三巻教育編、旧制高等学校資料保存会刊行部、一九八五、三三五―三九〇頁所収。著者W・J・ミチエルは山口高等学校講師。
- (44) 同右、三七九―三八五頁所収。
- (45) *Asien Tradition und Fortschritt: Festschrift für Horst Hammitzsch zu seinem 60. Geburtstag/Herausgegeben von Lydia Brill und Ulrich Kemoer. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1971.* 同書〇「謝辞(Dankwort)」欄(S. 711)には、刊行にやむし日本の外務省も協賛したことが記されている。
- (46) 毛利孝一、前出、二八一頁。
- (47) H. Hammitzsch, 'Die Japanologie in Deutschland', in: *Kaempfer-Siebole Gedenkschrift, MOAG Suppl. Bd. XXVIII, Tokyo, 1966.*
- (48) 尾関英正「H・ハミツチュによる俳句の翻訳と創作―ドイツ語俳句への一つの提言」『俳句文学館紀要』九(一九九六)一五頁。
- (49) 同右、および、同「ホルスト・ハミツチュの遺作―ドイツ語俳句三十句」、亜細亜大学言語文化研究所『東と西』一四号(一九九六)二七頁。ほかに、同「ドイツの俳文学をめぐって」『亜細亜大学教養部紀要』四三三号(一九九一)二〇七―二三三頁参照。
- (50) H. Hammitzsch, *Über den Hugel hinaus/Photographien von Pete-Cornel Richter; Haiku von Yodo. Herder, 1983.* H・ハミツチュ(尾関英正訳編、宮脇昌三訳句)『ドイツ語俳句集』そうぶん社出版、一九九三。
- (51) 毛利孝一、「ドイツ雑記」『命ふたたび』前出、二七九頁。
- (52) 名古屋大学博物館には論文抜刷三一点が寄贈され、「毛利フーフエラントコレクション」の一部として収められている。登録番号は「NUM-Lr 0004-100」から「NUM-Lr 0004-130」まで。同コレクションについては、西川輝昭「名古屋大学博物館所蔵『毛利フーフエラントコレクション』リスト」『名古屋大学博物館報告』一八号(二〇〇二)九一―九七頁参照。ハミツチュの献呈論文の利用については、西川輝昭先生(名古屋大学博物館教授)のご助力をえた。
- (53) 飯田経夫「遅れてやって来た『日本人論』」『Voice』七八号(一九八四年六月)二七八―二七九頁。
- (54) このうち、一九五四(昭和二九)年および一九六七(昭和四二)年の来日時における、名古屋大学経済学部での記念講演につ

いては、名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史一』前出、五三三―五三四頁、参照。

- (55) 『日本観察』60年いきいき描く 親道家アレク博士遺稿集』『日本経済新聞』一九八四年四月五日(夕)、一五頁。名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史 部局史一』同右、四一七頁も参照。

(56) G. C. Allen, *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*. op. cit., p. 70.

(57) *Ibid.*, p. 71.

(58) *Ibid.*

(59) *Ibid.*, p. 72.

(60) *Ibid.*, pp. 72-73.

(61) *Ibid.*, p. 73.

(62) *Ibid.*, p. 74.

(63) *Ibid.*, p. 75.

(64) 名古屋高等商業学校の場合、同窓会紙『其湛新聞』には、左記のような回想記がある。

① G. C. Allen, 「鈴木謙吉先生の訃に就いて」『其湛新聞』一〇四号(一九五八年五月一〇日)二頁。

② Do., 「高島教授の訃に接し」『同』一二二号(一九五九年一〇月一〇日)二頁。

③ A. John, 'In Memorium', 『同』一〇二号(一九五八年三月一〇日)三頁。

④ Do., 'Recollection & Biography', 『同』一四六号(一九六一年十一月一〇日)四頁。

⑤ Do., 'The Cuckoo from the German Black Forest and the Hototoguisu of Koyasan', 『同』一八〇号(一九六四年九月一〇日)二頁。

⑥ Do., 'A New Year's Message to The Nagoya Kitankai thought as an homage to the late Dr. Ryusei Watanabe', 『同』一九六号(一九六六年一月一〇日)二頁。

其湛三十五周年記念祭記念出版物である、那須秀一編著『剣陵今昔物語』にも、左記の回想記が寄せられている(同書、前出、



八二一八四頁)。

① G. C. Allen, 'Greetings to the Kiankai on the Occasion of the Thirty-fifth Jubilee.'

② A. John, 'My Start as Foreign Professor in the Nagoya Commercial College.'

- (5) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan,' *Wiener Medizinische Wochenschrift*, Nr. 15 (Jänner 1877), S. 351.  
小関恒雄・北村智明・H・フィアンデン「外国人のみた明治十年頃の日本の医学校(下)——愛知医学校の場合」『日本医事新報』  
No. 三二八八(一九八七年五月二日) 六六頁。

(66) 雇用契約によれば、ローレツの任期は一八七六(明治九)年五月一日から三年間。ただし、一年間雇い継がれて一八八〇(明治一三)年四月末日まで四年間、在任した。ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』前出、三七五頁より再引。

(67) 『名大医学部学友時報』二二九号(一九六八年八月一日) 九頁参照。ただし、筆者は現物を未見。

(68) 『名大医学部学友時報』同右、九一〇頁。二三〇号(一九六八年九月一日)一〇一一頁。二三一号(一九六八年一〇月一日)二七一―二九頁。二三二号(一九六八年十一月一日)二六一―二九頁。

(69) A. Hahn, 'Erinnerungen an die alte Aichi Igaku Semmon-gakko'. 池谷澄夫訳「昔の愛知医学専門学校の思い出」『橋会誌』  
第五号(一九八一年九月) 九八―一二三頁、第六号(一九八二年九月) 九八―一二三頁。

(70) A. Hahn, 同右、九七頁。池谷澄夫訳、同右、第五号、一一二頁。

(71) 辞令には、左記のように「嘱託教員」とある。愛知県立医学専門学校校友会『校友会雑誌』第二七号(一九二〇年十二月、一六四頁)より再引。

「ドクトル、フリードリツヒ、カール、アルノルド、ハン

愛知医学専門学校嘱託教員ヲ命ズ(但シ年手当金貳千四百円ヲ給ス)

明四十三<sup>マ</sup>年八月一日

愛知県

「ドクトル、フリードリツヒ、カール、アルノルド、ハン

独乙語学授業担当ヲ命ズ

(72) G. C. Allen, 'Students and Teachers,' in *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*. The Athlone Press, London, 1983, pp. 57-77.

(73) アレンは一九八二（昭和五七）年七月三十一日、心臓発作により急逝。享年八二歳。新聞の死亡記事には、つぎのようにある（『日本経済新聞』一九八二年八月一日、二三頁）。

「ジョージ・C・アレン氏（ロンドン大名誉教授、英国学士院会員）七月三十一日、心臓発作のため、英国オクスフォード市で死去、八十二歳。一九二二年から二五年まで名古屋高商（現名古屋大経済学部）の講師を務めて以来、日本の経済発展の研究に打ち込み、社会科学系の日本研究者としては草分け的存在。日本と欧米との経済摩擦問題では『日本は海外の批判に神経過敏』と親日的な発言で注目を集めた。リバプール大、ロンドン大教授などを歴任、日本経済の発展に関する著書多数。『欧米の読者に日本の実情を知らせ、日本理解に多大な貢献をなした』として昭和五十五年度の国際交流基金賞を受賞した。」

(74) もともとは『昨日の日本・明日の日本』(*Japan Yesterday and Japan Tomorrow*) という題であったが、「一九七〇年代の初め、あまりにも『個人的思い出』の記述が多すぎて売れないのではないかという理由で、多くの出版社から断られた」。アレンは残念ながら刊行を見ることはできなかったけれども、かれの死後、キタン会から、有志一五五名の好意により二四四万余円の寄付が集まり、ロンドンのアスロン社から刊行されたのである。高島勇「アレン先生の思い出」前出、二二六―二二七頁。Sir H. Cortazzi & G. Daniels eds, *Britain and Japan 1859-1991, Themes and Personalities*. op. cit., p. 311. 大山端代訳『英国と日本、架橋の人びと』前出、四四二頁。高島勇「恩師アレン先生の御急逝を悼む」『キタン新聞』三九五号（一九八二年九月一日）三頁。「故G・C・アレン教授出版資金募集」『キタン新聞』三九九号（一九八三年一月一日）一頁。「アレン教授遺稿出版訪英報告及び打ち合わせ会報告」『キタン新聞』四〇六号（一九八三年八月一日）二頁。「故アレン教授『一英国人教師の見た日本・回顧六十年』刊行とその頒布について」『キタン新聞』四二三号（一九八四年三月一日）二頁。

(75) 名古屋では、四月一日、キタン会と名古屋大学経済学部の主催のもと、同学部第一講義室で開かれ、ガウイング教授が「比類なき力―原子力時代の夜明け (Unparalleled Power, the Dawn of the Atomic Age)」と題する講演をした。「日本観察」60

年いき描く 親日家アレン博士遺稿集』『日本経済新聞』一九八四年四月五日(夕)一五頁参照。「故G・C・アレン教授遺著発刊記念のため、オックスフォード大学ガウイング教授来日」、「名古屋におけるガウイング教授特別講演会と歓迎会」『キタン新聞』四一五号(一九八四年五月一〇日)二頁。

- (76) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan,' *Wiener Medizinische Wochenschrift*, Nr. 15 (Jänner 1877), S. 351.  
小関恒雄・北村智明・H・フィアンデン訳「外国人のみた明治十年頃の日本の医学校(下)——愛知医学校の場合」前出、六六頁。

- (77) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。

- (78) A. von Roretz, *ebenda*, S. 352. 小関恒雄ほか、同右、六七頁。

- (79) A. von Roretz, *ebenda*, S. 351. 小関恒雄ほか、同右、六六頁。

- (80) A. von Roretz, *ebenda*, S. 352. 小関恒雄ほか、同右、六七頁。

- (81) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。文中の「アメリカ式の問答式便覧書」とは、左記の図書を指すと推定されており、現在、名古屋大学附属図書館医学部分館に同書が五冊所蔵されている(田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育、愛知県公立医学校における新ウィーン学派医学の受容』名古屋大学出版会、一九九五、一二三頁)。

W. Foster, *First Principles of Chemistry*. Harper, N. Y., 1871.

- (82) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan. II,' *Wiener Medizinische Wochenschrift*, Nr. 19 (26 Februar 1877), S. 457. 小関恒雄ほか、同右、六八頁。

- (83) A. von Roretz, *ebenda*, S. 458. 小関恒雄ほか、同右、六九頁。

- (84) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右、六八頁。

- (85) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。

- (86) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。

- (87) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。

- (88) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右、六八一―六九頁。
- (89) 三好信浩『日本教育の開国 外国教師と近代日本』前出、二四三頁。
- (90) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan,' S. 352. 小関恒雄ほか、前出、六七頁。
- (91) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan. II,' S. 457. 小関恒雄ほか、同右、六八頁。
- (92) A. von Roretz, 'Medizin und Unterrichtswesen in Japan,' S. 352. 小関恒雄ほか、同右、六七頁。
- (93) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。
- (94) A. von Roretz, *ebenda*, S. 352, 457. 小関恒雄ほか、同右、六七―六八頁。
- (95) A. von Roretz, *ebenda*, S. 457. 小関恒雄ほか、同右、六八頁。
- (96) A. von Roretz, *ebenda*. 小関恒雄ほか、同右。
- (97) A. von Roretz, *ebenda*, S. 458-459. 本項の訳文は、小関恒雄ほか訳と同文ではない。拙訳には、藤井基貴君(名大大学院生)の助言をえた。
- (98) A. von Roretz, *ebenda*, S. 459. 同右。
- (99) A. von Roretz, *ebenda*. 同右。
- (100) 田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育、愛知県公立医学校における新ウィーン学派医学の受容』前出、第四章および終章。主たる建議・献策には、汚水排導法の建議、健康警察医官設置の提言、癲狂院設立の建議、がある。
- (101) 『名古屋大学五十年史 通史一』前出、五三一―五四頁参照。
- (102) 青井東平編『名古屋大学医学部九十年史』名古屋大学医学部学友会第五十二回学友大会、一九六一、二三―二七、三一―三二頁。作道好男編『名古屋大学医学部百年史』財界評論新社、一九七七、五五、七一頁。拙稿「ドクトル・ヨングハンス―福沢諭吉の息子たちの洋行時代の後見人」『三田評論』八六四号(一九八五年一月)三八―五一頁参照。ヨングハンス時代の医学教育の位置づけをめぐるのは、田中英夫、前出、一一三―一二四頁、『名古屋大学五十年史 通史一』同右、五三一―六四頁、などに詳しい。

- (103) A. von Roretz, *a. a. o.*, S. 351-352, 458. 小関恒雄ほか、前出、六六一六八頁。
- (104) 小関恒雄ほか、同右、六九頁。三好信浩『日本教育の開国 外国教師と近代日本』前出、一七六頁。梅溪昇『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』日経新書、一九六五、一九〇—一九六頁、その他。
- (105) A. Hahn, 'Erinnerungen an die alte Aichi Igaku Semmon-gakko', 『橋会誌』第三号（一九七九年九月）、八三—八四頁。池谷澄夫訳「昔の愛知医学専門学校の思い出」『橋会誌』第五号（一九八一年九月）九九—一〇〇頁。
- (106) A. Hahn, 同右、八四頁。池谷澄夫訳、同右、一〇〇頁。
- (107) A. Hahn, 同右、八五頁。池谷澄夫訳、同右、一〇〇—一〇一頁。
- (108) A. Hahn, 同右。池谷澄夫訳、同右、一〇一頁。
- (109) A. Hahn, 同右。池谷澄夫訳、同右。
- (110) A. Hahn, 同右、八五—八六頁。池谷澄夫訳、同右。
- (111) A. Hahn, 同右、八六頁。池谷澄夫訳、同右、一〇一—一〇二頁。
- (112) A. Hahn, 同右、八七—八八頁。池谷澄夫訳、同右、一〇三—一〇四頁。
- (113) A. Hahn, 同右、八八—八九頁。池谷澄夫訳、同右、一〇四頁。
- (114) A. Hahn, 同右、八九頁。池谷澄夫訳、同右。
- (115) 「尾三の平野に行われた陸軍大演習に臨まれた皇太子殿下は、県下の学術、殖産、農工業など御視察の途、本校に行啓」された（『名古屋大学医学部九十年史』前出、一一五頁より）。
- (116) A. Hahn, 前出、八九—九〇頁。池谷澄夫訳「昔の愛知医学専門学校の思い出」『橋会誌』第五号（一九八一年九月）一〇五頁。
- (117) A. Hahn, 同右、九〇頁。池谷澄夫訳、同右。
- (118) A. Hahn, 同右、九〇—九一頁。池谷澄夫訳、同右、一〇六頁。
- (119) A. Hahn, 同右、九一頁。池谷澄夫訳、同右、一〇七頁。

- (120) A. Hahn, 同右、九一一九二頁。池谷澄夫訳、同右。
- (121) A. Hahn, 同右、九二頁。池谷澄夫訳、同右、一〇七一—一〇八頁。
- (122) A. Hahn, 同右、九二—九三頁。池谷澄夫訳、同右、一〇八頁。
- (123) A. Hahn, 同右、八六—八七頁。池谷澄夫訳、同右、一〇二頁。
- (124) A. Hahn, 同右、八七頁。池谷澄夫訳、同右、一〇二—一〇三頁。
- (125) A. Hahn, 同右、九六頁。池谷澄夫訳、同右、一一一頁。
- (126) A. Hahn, 同右。池谷澄夫訳、同右、一一—一二頁。
- (127) A. Hahn, 同右。池谷澄夫訳、同右、一二頁。
- (128) 『名古屋大学医学部九十年史 資料集10 旧職員履歴 助教授以上』(名古屋大学大学史資料室に複製版を所蔵)には、つぎのように記されている。

「千九百二十一年(大正十年)三月二十七日愛知医科大学予科講師を嘱託せられ、独逸語を教授したが、昭和八年三月三十一日右予科廃止につき解職同年四月一日図書館事務を嘱託せられ執務中 昭和十六年二月十四日逝去す。」

- (129) A. Hahn, 前出、九三—九四頁。池谷澄夫訳、前出、一〇九頁。
- (130) A. Hahn, 同右、九四頁。池谷澄夫訳、同右、一〇九—一一〇頁。
- (131) A. Hahn, 同右、九四—九五頁。池谷澄夫訳、同右、一一〇頁。

- (132) ハーンは一九四一(昭和一六)年二月一四日死去。遺骨は名古屋陸軍墓地(名古屋市東区出来町二丁目一六番地。ただし、一九三一年に同市内の平和公園へ移転)に埋葬された。「故人の遺徳を讃へて けふ名帝大の準医学部葬」『名古屋新聞』(一九四一年二月一九日)三頁参照。ただし、『名古屋大学医学部九十年史 資料集10 旧職員略歴 助教授以上』(前出)には、「覚王山日泰寺に葬る」と記されている。その覚王山日泰寺(名古屋市千種区法王町)には、墓碑が、一九四一(昭和一六)年九月から二〇〇〇(平成一二)年三月までであった。墓籍は二号増三等五番。土井次夫「私共の恩師ア・ハーン先生のお墓に詣でて」『橘会誌』第二号(一九七八年九月)一六二—一六四頁、および、曾我立巳「アーノルド・ハーン先生碑とお別れの会」『名大医学部学友

時報』六〇四号（二〇〇〇年五月二二日）一〇頁、その他参照。拙稿「もう一人のハーン先生」『中日新聞』（二〇〇二年六月二七日）一〇頁も参照。

地元紙『新愛知』における死亡記事は、つぎのとおり（一九四一年二月一五日、三頁）。

「アーノルドハーン氏

名大医学部図書館嘱託独逸人アーノルドハーン氏はかねてりんぱ腺肉腫のため同大学付属病院に入院中であつたが十四日午後零時五十分死去した、享年七十三、同氏は来朝以来五高、八高の独逸語教授を経て現名大医学部の愛知医専時代に講師として赴任、在名三十二年間に亘る日本の趣味の人で、寓居は熱田区玉ノ井町四六にあるが肉親もなく全く孤独生活を送つてゐた」。

(133) A. Hahn, 前出、九七頁。池谷澄夫訳、前出、一一二―一二三頁。

(134) 山内一信「アルノルド・ハーン先生の追想記録『昔の愛知医学専門学校の思い出』を読んで」第16回橘会総会講演記録（一九九二年九月二三日）、六頁。

(135) 『名古屋大学医学部九十年史 資料集10 旧職員略歴 助教授以上』前出。上村直己「第五高等学校外国人教師履歴」『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』二二二号（一九八七）七七頁。

(136) G. C. Allen, 'Students and Teachers,' in *Appointment in Japan, Memories of Sixty Years*, op. cit., pp. 57-58. 以下同。  
→回想記の訳出にあたって、松村好浩先生（姫路独協大学教授）のご指導をえた。記して多謝する。

(137) *Ibid.*, p. 58.

(138) *Ibid.*, p. 57.

(139) *Ibid.*, pp. 58-59.

(140) *Ibid.*, p. 59.

(141) *Ibid.*, pp. 69-70.

(142) *Ibid.*, p. 70.

- (143) *Ibid.*, p. 59.
- (144) *Ibid.*
- (145) *Ibid.*, pp. 59-60.
- (146) *Ibid.*, p. 60.
- (147) *Ibid.*
- (148) *Ibid.*
- (149) *Ibid.*, p. 61. 渡辺竜聖校長がアレンに対して「学生を喜ばすことが大事だと力説した」ことは、同書（九頁）でも明記されている。
- (150) *Ibid.*
- (151) *Ibid.*, p. 62.
- (152) *Ibid.*
- (153) *Ibid.*, p. 63.
- (154) *Ibid.*, p. 64.
- (155) *Ibid.*
- (156) *Ibid.*
- (157) *Ibid.*, p. 66.
- (158) *Ibid.*, p. 65.
- (159) *Ibid.*
- (160) *Ibid.*, p. 67.
- (161) *Ibid.*, pp. 67-68.
- (162) *Ibid.*, p. 68.



- (163) *Ibid.*
- (164) *Ibid.*, pp. 68-69.
- (165) *Ibid.*, p. 69.
- (166) *Ibid.*
- (167) *Ibid.*
- (168) *Ibid.*, p. 70.
- (169) 武藤康平「FOREIGN PROFESSORSへの追憶」前出、二一九頁。アレンがアシュレー著を教科書に用いたことについては、アレンの前任者である宮田喜代蔵の随想「名高商創立の当初」において、つぎのように記されている（『其湛啓友新聞』二六九号、一九七二年二月一〇日、一頁所収）。第二年目に私は経済史の講義を担当することとなり、“Ashley W. The Economic Organisation of England. An Outline History”を教科書として取り上げた。ところが、私はその年末にドイツへ在外研究のことが決まったので、経済史の講義は一学期で中断し、その後任にイギリスから、その年に大学を卒業された新鋭のアレン G. C. Allen さんを招いたわけである。アレンさんはアッシュレー教授に親しく指導を受けられ、後には前掲の書へ追加した一章を執筆された程の間柄であったので、来日して自分の担当する経済史の教科書に恩師の著書が選ばれており、これを引継ぐことを非常に喜ばれた。また、藤村幸三郎「身辺雑記（七）」（『其湛新聞』一六二号、一九六三年三月一〇日、四頁）、塩野谷九十九「アレン先生について」（『其湛啓友新聞』二五四号、一九七〇年十一月一日、二頁）などにおいても、アレンがアシュレーの同書をテキストに用いて、「経済史」を講じたことが記されている。
- なお、アレンは同書の第二版（一九三五）には一章分を、第三版（一九四九）には三章分を、それぞれ補筆した。ちなみに、同書第三版（矢口孝次郎訳『イギリス経済史講義』有斐閣、一九五八）の書名はつぎのとおり。
- Sir William Ashley, *The Economic Organisation of England. An Outline History, With Three Supplementary Chapters*  
by G. C. Allen. Longmans, London, N. Y. & Toronto, 1949.
- (170) 武藤康平、同右。授業中でも、ラグビーの話になると、「黒板にこまごまと図を画いてイギリスのラグビー試合の模様の説明に

熱中するのであった」とかいうことも伝えられている。那須秀一編『剣陵今昔物語』前出、一七頁。

(171) 那須秀一編、同右、二〇頁。かれらは同校の紀要『商業経済論叢』に研究成果を発表した。同誌第九卷(創立第拾周年記念論文集、一九三一年一〇月)には、外国人教師四名の欧文論文が掲載されている。学友会誌『剣陵』の創刊号(一九二二年七月)にも外国人教師三名の論文が載っている。アレンも、在任中、『商業経済論叢』の第二卷(一九二四年一月)に、『A Recent Challenge to the Gold Standard』と題する論文を寄稿した。

(172) 英国で「日本研究が学術の一分野としての地歩を固めはじめるのは、一九世紀末から第一次大戦にかけてである」が、それらの日本研究は「外交や教育に関連して滞日した経験に端を発している」ものが多い。歴史家のJ・マードック (James Murdoch, 一八五六—一九二二)、C・R・ボクサー (Charles Ralph Boxer, 一九〇四—)、G・B・サンソン (George Baily Sansom, 一八八三—一九六五)、作家のL・ハーン (Lafcadio Hearn, 一八五〇—一九〇四)、神学研究者R・A・ポインジー・フェー (Richard Arthur Ponsonby-Fane, 一八七八—一九三七) などであるが、アレンもそうした一人であった。「日本研究」、下中弘編『日本史大事典』第五卷、平凡社、一九九三、五六七頁。

(かとう・しろうじ 大学史資料室)